

京飛脚仲間について

付、京飛脚関係史料

藤村潤一郎

京飛脚については、明治期に幸田成友氏が編纂主任となった「大阪市史」⁽¹⁾と、昭和一〇年代に黒羽兵治郎氏が監修された「東区史」⁽²⁾、及び昭和四五年に宮本又次氏の「小野組の研究」において既に研究されている。前二者で使用された史料は「株仲間名前帳前書」「京飛脚仲間定帳」「増補登船独案内」「大阪商業史資料」などであり、最後者は小野家文書である。

前二者の場合について考えると、「大阪市史」の編纂に際して作製された慶応義塾図書館蔵「大阪史編纂係図書目録 巻」に明治一四年刊、青江秀編「駅通志稿」が購買としてあり、大阪史編「図書目録 参」には「登船独案内」が同様に購買として記入されており、参考図書として購入使用された事を示しているが、前記の残り三史料については目録三冊には見当らない。「株仲間名前帳前書」は幸田成友氏旧蔵で、現在は慶応義塾図書館に架蔵されている。

つぎに大阪市立中央図書館蔵、大阪市史編纂資料「引用書目解題 上」には「大阪商業史料 写 二十三卷 大阪商業会議所蔵」とある。この「大阪商業史料」とは大阪商工会議所編集「大阪商業史資料」三五卷、別巻の可能性がある。同書一五卷運輸及船舶⁽³⁾(其ノ一)に大阪商業会議所の用箋に「京飛脚仲間定帳」天明八申年改、「京飛脚仲間名前帳」嘉永四辛亥年三月、「(無表題)」安政六己未年九月が筆写されている。目次では最後の安政六年分は「京飛

脚仲間名前帳」の一部と考えられている。「大阪市史」は「京飛脚仲間定帳」はこの表題を出しているが、「大阪商業史資料」としているのは安政六年の「(無表題)」の史料によっている箇所であるから、京飛脚については「大阪商業史資料」「株仲間名前帳前書」「増補登船独案内」などにより記述したと考えられる。

また大阪市立中央図書館蔵、大正一四年一月「大阪市史編纂資料目録」でも事情は変わらないので、「東区史」も前記の史料によったと考えられる。

さて国立史料館には日本実業史博物館旧蔵の(一)「京飛脚仲間定帳」天明八戊申年改、(二)「京飛脚屋定目」嘉永三庚戌年四月改之、(三)「京飛脚仲間名前帳」嘉永四辛亥年三月、四「取極申定帳」安政六未年九月がある。この四冊には「文久童」の印があり書店から購入された事を示している。渋沢敬三氏による同博物館の資料蒐集は昭和七年以降であるから、この史料も当然同年以後の購入である。この史料を以下では実業史本と記す。前記安政六年「(無表題)」は四に相当する⁽⁵⁾。

つぎに実業史本と同様の四冊が三井文庫に所蔵されている。京飛脚屋京屋清右衛門のものであり、四冊共に大正一〇年五月三日、大阪鹿田書店から購求されたものである。この史料を三井本と以下記す。

私は実業史本、三井本をみる機会を得たので、他の若干の京飛脚関係史料と共に紹介する。勿論本稿は基本的には先学の研究の枠を越えるものではない。

一 地誌にみえる京飛脚

大阪関係の地誌で最初に京飛脚について記しているのは延享四丁卯孟春、志田垣与助撰「改正増補難波丸綱目」下之二に諸国飛脚宿の内に京飛脚一九人がある⁽⁶⁾。同書の寛延版、宝暦版、宝暦九年版も同様である。つぎに安永六年

丁酉初夏、陰山三郎兵衛序「難波丸綱目」四には京飛脚一九人、会所一人ある。⁽⁷⁾ 一九人の内で二人は同一人物であり、従って一八人の内で一六人は延享四年の京飛脚と連続し、一人はその可能性がある。新規開業は一人と考えられる。同書の天明版、享和元年版は安永六年と同様である。

元禄一〇丁丑歳仲夏上梓、天保六乙未歳仲秋改正補刻「日本国花万葉記」⁽⁸⁾ 卷五に収録されている安永六年陰山三郎兵衛序、天保一〇年己亥一〇月改正「難波丸綱目」四の京飛脚も安永六年と同様である。

延享四年以前については難波丸綱目の母胎である元禄一〇丁丑歳仲夏当辰刊、難波の東乃軒不洗子序「日本国花万葉記」⁽⁹⁾ 卷六之二に収録されている「撰州難波丸」の大坂と諸国飛脚宿に京飛脚は見当らない。京関係としては京魚荷飛脚七人がある。延宝七己未湯水下旬、水雲子序「難波雀」、延宝七己未林鐘中旬、難波隠士友月翁「難波鶴」⁽¹⁰⁾ にも京飛脚は見当らず京大坂通魚荷飛脚宿が前者は三人、後者は七人ある。「改正増補難波丸綱目」の延享四年版には京魚荷飛脚は「八百や町ニアリ」⁽¹¹⁾ とのみ記るされている。京飛脚と京魚荷飛脚との関係は今後研究したい。

さて寛政一二年庚申初冬、安藤主人序「大坂と京都迄登船独案内」⁽¹²⁾ には京飛脚一四人があり、内二人は当時休、残り二人の内で一人は米方早飛脚でもある。二人の内三人は京都の大坂飛脚である出店が定まっておらず、九人は各々引合の店がある。

その取扱地域は江戸、尾張、美濃、近江、伊勢、若狹、加賀、越前、越中で「道中筋の便リハ此京飛脚屋ヨリ便リ有之ナリ」となっている。年中休日定は正月が二、三、一〇、一四、一五、一六日、三月が二、三日で但し一日は金銀手形バカリとある。五月は四、五日、但し三日切として三月と同様である。六月は早出し、七月は一三、一四、一五、一六日、但し一二日切で、九月は七、八、九日、但し七日は金銀手形バカリである。一〇月は三〇日、一二月は二九、三〇日、但し二八日切で小の月は二七日切である。なお一二月は並飛脚、早飛脚共に二五日切である。

一般に六、一三日は昼九ツ時出刻であり、四、一、一五、一七、二〇、二二、二三日は暮六ツ時出で、但し二五、三〇日は休日である。

ところで文化はし甲戌にやとるのやよひ（一一年三月）、曝筋亭序「大坂繁花風土記」下巻に飛脚出日として「京都 毎夜出る 休日ハ正月三日、六月祇園、或ハ天神祭、座摩、御霊、住吉や、其外ハ五節句ごゑん迄ハ勿論節前夜日手前ハ休日也、中元ハ十六日迄、其余臨時之事ハしらず」とあるのは京飛脚の事ではあるまいか。

再び京飛脚に戻ると、文政二年卯仲夏、芳山堂主人序「商人買物独案内」⁽¹⁴⁾には京飛脚一〇人があり、内二人は京都飛脚出所一人と取引している。この一〇人は前記寛政一二年の京飛脚と九人は連続し、残り一人も恐らく連続している。なお文政七年中秋、芳山堂主人序「商人買物独案内」⁽¹⁵⁾、文政七年芳山堂主人序、天保三年辰八月刊「増補買物独案内」⁽¹⁶⁾の京飛脚は文政二年と同様である。

つぎに天保二年秋刊、清水九文堂序「商人買物独案内」⁽¹⁷⁾（京都買物独案内）の大坂順番飛脚仲間井江戸関東筋東国西国紀州泉州大廻シには大坂取引店、即ちこの京飛脚が一二人ある。この内で八人は前記文政二年の京飛脚と連続し、四人は新規である。なお二人で京都の大坂順番仲間間の一人と取引している場合が二件ある。

そして天保丙申（七）年初冬、松尾花堂序「増補登船独案内」⁽¹⁸⁾には京飛脚大坂名所付一二人、仲間通路所一人があり、前記天保二年の京飛脚と一〇人は連続し、二人が新規である。仲間通路所も新規である。その他に二人で大坂飛脚京都名処付一人と取引しているのが二件がある。

彼等の取扱地域は前記寛政一二年「大坂及京都迄登船独案内」の取扱地域の他に「西国筋、紀州、泉州、道中筋の便りは此京飛脚やと便り有之」とあり、年中休日定についても「但し仕立飛脚ハ何時にても差出候事」と書加えられている。

ところで天保一一、一二年頃新板と推測される「難華みやげ」⁽¹⁹⁾の諸商売人出世競相撲には番附の行司として町飛脚屋、江戸飛脚屋、京飛脚屋、三条宿屋が記るされている。多少は名の通った存在だったろう。

つぎに弘化三年きさらぎ、寿栄堂資翁春山序「諸匠諸商買物独案内」⁽²⁰⁾（大阪商工銘家集）には東国筋北国筋京飛脚出所として一〇人あり、すべて前記天保七年の京飛脚と連続している。ここでも二人で京都一人と取引する場合が二件ある。

明治期について直接の史料ではないが、明治四辛未冬改正「明治改正京羽津根」⁽²¹⁾卷三に大坂順番仲間がみえているから取引先の大坂の京飛脚は存在している筈である。

以上で延享四年から弘化三年迄の京飛脚を地誌でみたが、この間に延享四年一八人の内で營業を連続したのは四人に過ぎない。

惣人数も安永六年「難波丸綱目」と寛政一二年以降の諸案内とはかなり差がある。従って少なくとも天保一〇年改正「難波丸綱目」は京飛脚に關しては実情から著じるしくかけはなれていてと考えざるを得ない。

二 京飛脚天満屋と三井兩替店

京飛脚の營業を三井兩替店の場合についてみると、三井兩替店は天和三年に江戸兩替店（店名三井次郎右衛門）開設、貞享三年京兩替店（三井三郎助）開店、元禄四年大坂兩替店（はじめ三井次郎右衛門、寛政五年以後は三井元之助）設立で、三店は業務上連絡があり元文二年六月「三ヶ所兩替店同苗出勤式」によると京兩替店は三ヶ所兩替店の元店となっている。⁽²²⁾

この三井兩替店が取引した京飛脚天満屋六兵衛は延享四年から幕末迄營業が連続した家であり、取引の京都の大坂

飛脚は天満屋六兵衛、又は同吉兵衛である。

三井文庫所蔵文書によると、宝暦五年三月付で天満屋六兵衛は竹内文治郎、井口孫兵衛、宇野十助から銀五〇〇目
を身上不如意を理由に五カ年賦、年二回五〇匁宛返済の条件で借用している事実がある。貸主三人は恐らく三井兩替
店の者であろう。なお組中の天満屋長兵衛、同与兵衛が奥判をしている。

この天満屋の請負証文は次の通りである。

請負証文之事

一従大坂御店、京都御店江往来御用金銀并ニ御用御書、御証文之類、書状、諸荷物共、於大坂、天満屋与兵衛、
同六兵衛印形ヲ以御渡可被下候、万一御用金銀紛失仕候歟、如何様之儀出来仕候共、私共組中ニ相弁、少し茂
御損掛申間敷候、其外 御用御書御届御状之類に何不寄、若シ紛失仕候歟、如何様之六ヶ敷儀御座共、私共御
請負申上候上者、何方迄茂罷出、急度埒明御難掛申間敷候、為其請負連判証文仍而如件

天明七年

京都三条東洞院

未七月

天満屋吉兵衛^印

大坂京橋六町目

天満屋与兵衛^印

同今橋屯町目

天満屋六兵衛^印

三井治郎右衛門殿

三井三郎助殿

三井元之 助殿

御名代中

即ち京、大坂間の現金、書類、書状、荷物の運送を京、大坂の天満屋三軒が組中として三井兩替店の江戸、京、大坂店に請負っている。なお天満屋与兵衛は寛政一二年「大坂と京都迄登船独案内」には東堀川上ノ口新築地、当時休として見えている。彼は天満屋六兵衛と宝暦期にこの請負証文には同格としてあるが、他の地誌の京飛脚には全く記るされていない。

同年同月付で同請負人、同宛名人の京都から大坂への御用金銀を京都天満屋吉兵衛方で請負う旨の請負証文がある。これら請負証文に附随して第一表の「覚」がある。これは天満屋の請負値段と考えられる。内容は通し飛脚、出

口走り、御状箱、書類、用状、現金である。

また同年に次の請負証文がある。

請負証文之事

一大坂 御奉行様諸御役人様方江京都

御奉行様諸御役人様方と御太切成 御用御書通井御証文其外、諸方江之御届物御差下被成候節、京都天満屋吉兵衛方江請取之、大坂表江送届申候付、拙者共請負申処実正也、然ル上者何程御太切成品ニ而茂、無御氣遣吉兵衛印形之請取手形を以御渡可被成候、道中太切仕無遅滞御届可申上候、右之通請負候上者万一於道中紛失其外如何様之儀出来仕候共、拙者共何方迄茂罷出急度申明、各

第1表 天明期天満屋賃銭表

種 類	賃
仕立通し飛脚	
5時限り	12.00 匁
4時限り	16.00
3時限り	28.00
出口走り	1.60
御状箱(上半季) (四ツ時直着)	40.00
御書類(戈領付)	1貫文
御用状類(並下し老番屈)	1.20 匁
小判 100両	2.00
南銀 100両	3.00
銀 1貫目	0.80

京飛脚仲間について(藤村)

江少茂御難儀掛申間敷候、為後日飛脚屋仲ヶ間連印証文仍如件

天明七年未七月

京都東洞院三条上ル丁

天満屋吉兵衛[㊤]

大坂京橋六丁目

天満屋与兵衛[㊤]

同今橋壱丁目

天満屋六兵衛[㊤]

三井次郎右衛門殿

三井三郎 助殿

三井元之 助殿

これは京都奉行所から大坂奉行所宛の書類を三井両替店を経由して京飛脚が請負っている事実を示している。証文は京の大坂飛脚に重点があるが、大坂から京都へも可能性がある。

さて請負手形は次の通りである。

覚

一金千両 檜木太郎殿行

右之通封印儘儘ニ請取、無相違相届ヶ可申候以上

申七月十日

印

三井様

天満屋

六兵衛[㊤]

上の印は「上下請届、御吟味物、三年限」と三行、下の印は「今橋天六、金銀請取」の二行書である。

営業では延着が屢々問題になっている。安永七年戊子一月付、三井三郎助代五十川清太郎、西田新四郎宛、天満屋吉兵衛「〔天満屋吉兵衛仲間請負証文〕」には、最初に同年月付、三井三郎助代五十川清太郎、西田新四郎宛、天満屋六兵衛・天満屋与兵衛「一札」がある。それは京大坂間の為登下物御用を天満屋が請負っているが、近年通り走り御状に間違があり、登りの通り走り御状が延着した。用件が三井両替店限りのものであったから御店限りで処理したが、これが御公儀様御用の品物で同様の事があれば何様な事態になるか測り難いので、他の飛脚に請負替を考えたが、従来からの出入を考慮して是迄通りになり、今後の刻限厳守を確認している。

この組中連印一札を京の天満屋吉兵衛も確認し、今後万一の場合には替られても御詫などほしない事を請負っているが、これは何か御用差支が生じたからだろう。

しかし延刻は止まらない。安政六年未子月二一日付、三井様御店宛、天満屋六兵衛「乍憚御断書」には、京御店から二〇日未下刻出し六時限り書状が二一日晝酉の刻に到着し届けたが延刻を指摘され、強風雨を理由に託を入れている。この様な事は屢々あったと考えられる。

道中の治安にも問題があり、寅年一月一六日付、京都三井様御店宛、大坂天満屋六兵衛「御断書」によると大坂三井両替店から一四日夜戌刻出し、京都に丑の刻着の三時限り別仕立飛脚は鳥羽に丑の刻前に到着、同所継場からの飛脚人足は道中の殺人現場を恐れて逃帰り、御用状は晝になって人足を増して別経路で届けた。鳥羽継場からの報告で断書を出している。

その他八幡宮御幸のため経路が混雑する際には予じめ断っている。即ち（文化三年）四月付、天六「〔飛脚屋天六断書〕」には、一一日の御幸のため九、一〇日出しは兩日共に七時迄に御用向を申請ける事としている。

第2表 慶応2年京為登
翌日着別仕立賃増銭表

式歩金・式朱金	増 銭
1000兩～ 3000兩	銭5貫文
3000 ～ 5000	6
5000 ～ 7000	8
7000 ～ 10000	10
10000 ～	100兩ニ付 100文

幕末の政情はこの京飛脚にも影響を与えた。丙寅（慶応二年）一〇月付、三井様御兩替店宛、天満屋六兵衛「京為登翌日着別仕立賃書定」は、近年京に登せる御用が多く飛脚荷などの運送が確実に翌日到着は困難となった。そのため兩替店が急ぎの正金は別宰領付仕立で為登る事とした。定式並便賃赤千両に付き兩替屋様三貫文定の駄賃の外に増賃は第二表の通りである。式歩金、式朱金について別仕立宰領日雇、上下船賃、弁当支度料、小遣錢打切渡ししの条件である。なお銀沓歩銀、沓朱銀は重量のため定式賃、宰領人足賃共に倍賃となっている。

明治五年にこの天満屋と三井兩替店の関係は消滅する。申年三月付、三井様御店宛、天満屋吉兵衛「御届ケ書」は、従来大坂今橋天満屋六兵衛が届けた京都の三井から請負った大坂下し御用向を天満屋吉兵衛が勤めたが、今回山崎文助方に預けたとしている。得意先の譲渡が行なわれた訳である。

三 京飛脚和泉屋・福田屋と大坂本屋仲間

「大阪書籍商旧記類纂」⁽²³⁾によると、享保八年八月七日に大坂本屋仲間は京、江戸に准じて行司を設け新板物改仰付を願出ており、同年一二月二三日に大坂町奉行から仰付けられている。また同年九月には京、江戸同業者と共に住吉社内に文庫を設け板行書物の神納を定めている。さらに文化一三年四月には大坂、京都の本屋仲間は新板物出来の際には互に出来本沓部宛の差出を約している事実がある。これらの事からすれば大坂本屋仲間は京都本屋仲間と連絡があったと考えられ、それには京飛脚が従事していた。

由宝曆一四甲申年正月、至明和六己丑年正月、書林行司「一番 出勤帳」⁽²⁴⁾の宝曆一四年三月二八日の条に京飛脚和

泉（泉）屋弥右衛門について大坂本屋仲間の六人の会合が予定されたが不参で四月朔日に再合が廻文されたとある。

四月朔日には宝暦一三年五月十九日の行司六人の内二人が出席し飛脚仕替が駄賃下直化を理由に同意されている。

五月九日に和泉屋の荷物往来不勝手のため他の飛脚屋に仕事を渡す事になり京飛脚一二軒に交渉したが何れも請取れないと答えているが、更に検討を約している。従って延享四年「改正増補難波丸綱目」には京飛脚は一八人であるから、五人は交渉の対象となっていない。同夜和泉屋に京往来は同年五月切と通告している。一日に京飛脚虎屋長兵衛手代、大坂屋七郎右衛門が返答を二、三日延期したいと求めたが本屋仲間は拒絶した。これに対し、飛脚側は京飛脚京屋甚三郎が提出した一八文、二四文の直段とし、その他に注文状に状賃を受取りたいと申出た。この直段は何の直段か不明である。本屋側は前例ない点をあげて断り、本屋仲間以外にも現在は注文状は無賃であるから、この他仲間注文状も状賃を要するなら相談に應ずるし、また二四文、三〇文の直段なら相談すると返答した。

翌一二日に京飛脚虎屋手代に本屋側は前記二四文、三〇文の飛脚賃に決定しなければ仲間中行司から達し難いと一四日迄に返答を求めた。一四日に返答はなく、一五日に虎屋は同業の和泉屋への意味合もあってこの案は受諾できないと答えている。

同日、野村長兵衛が和泉屋に頼まれて挨拶があったが本屋側では断っている。野村が虎屋かは不明である。

一七日に返答を催促したが、京飛脚虎屋手代と永楽屋清右衛門が明晩迄に返答を約し、本屋側は若し返答のない場合は勝手次第に断るとしている。そこで一八日には京飛脚明石屋吉兵衛、伊勢屋治郎兵衛、河内屋与兵衛が再び一二軒の内で京往来の荷物の引受けの説明を受けた。

結局一九日に河内屋が和泉屋に代って京往来荷物を引受けて勤める一札ができ、翌二〇日にこれを本屋側では京都に書状を出している。なお飛脚直付板下を二一日に認め、板木は二四日に出来た。

その二四日に新飛脚河内屋が本屋仲間に引合わされ、翌二五日には飛脚替りについて触書を行司から仲間に出し、これを裁配帳に記入しており、他に次の一通が出された。

一 河内屋与兵衛義新規之事ニ候間、書状并紙包共、当分ハ先々之町所御書付可被成事

一 駄賃、京弘、大坂弘と申事、明白ニ御書付可被成候事

一 荷物随分昼廻り之時御出し可被遣候事

一金銀は勿論紙包其外何ニても、請取印形取遣可被成候事

右之通、能々御心得可被成候、已上

申五月

行司

一般的な荷物、金銀、書状、紙包などが取扱われている。

同日に河内屋便で京から返書が下ってきており、また河内屋使に直付摺本が渡されている。

しかしこれによつて事は解決していない。即ち六月九日には飛脚河内屋与兵衛判組請負人三軒を行司が呼寄せて対談し、一三日には飛脚屋の件について先行司がきている。そして二六日には河内屋方の飛脚を止させる一札を取る事について寄合っている。

七月朔日には仲間中で京都上下往来荷物の飛脚は別に人足を立てる事とした。一七日からは別人足を拵えた。世話人は当番で勤める事になっている。

八月一日には京都銭三殿等の御挨拶で再び和泉屋が申付けられ、一四日に行司から仲間中に申渡されている。この間の具体的な事は明らかでないが、京飛脚仲間では得意先の固定化が強かったのではあるまいか。

さて天明四年九月吉日、大坂本屋仲間「鑒定録」によると、宝暦一〇申年五月定の京飛脚和泉屋弥右衛門駄賃定は

第三表の通りである。本屋仲間の櫃が注目され、上り下りで駄賃が違なるのは淀川の舟運利用が関係しているのではあるまいか。

再び従文政六癸未歲正月、至文政七甲申歲六月、書林仲間年行司「出勤控」三拾五番⁽²⁶⁾によると、文政六年三月二〇日には和泉屋弥右衛門から口上書が本屋仲間に提出され評議がなされている。

四月五日に京飛脚和泉屋に対して従来通り状賃無料であるか、それとも現在引合ないと云うなら年限を切って荷物駄賃の割増をしてはどうか、どちらか決定すれば本屋仲間で相談すると返答したが、和泉屋は京飛脚仲間の申合で無料では書状運送は一切出来ないため、願書通り聞届けを願っている。本屋側はこの泉弥一件につき京都本屋仲間行司に書状で相談している。

八月二六日に和泉屋に古来の記録を見せて従来通りを求める事とし、若し不承知の際には改めて仲間で相談する事になっている。

交渉は難航したらしく一〇月五日には和泉屋が再び願い仲間が評議している。さらに十一月二〇日に和泉屋が会所に提出した講の仕用書を評議した。

約一ヵ月後の十一月二六日には和泉屋が仕法書を持参し仲間家別に入講を依頼した。これに対して本屋仲間では講は銘々が相対であり行司が指図する事ではない。状賃金は

第3表 宝暦10年京飛脚和泉屋大坂本屋仲間駄賃定表

紙包	200目以下	0.20	匁
	300目以下	0.25	
	400目以下	0.30	
	500目以下	0.35	
	600目以下	0.40	
	是より1貫目	0.60	替
手形入書状 素人状 仲間注文書状 本素櫃 中櫃 大櫃(江戸櫃) 大々櫃	状	0.20	
	状	0.10	
	状	無賃	
	10貫目迄	3.00	上り
		2.30	下り
	17貫目迄	4.50	上り
		3.10	下り
	17貫目より以上	5.50	上り
		3.80	下り
	20貫目以上	6.50	上り
		4.50	下り

旧来からの事で無料となっている。荷物駄賃は状賃無料を前提として荷物賃を外並より高くなっている。仲間では「通用之所一わり引正ミ」の額でよいとなったが、当行司が実は前から一割上げで期限は三、五カ年限で交渉してあると話したのでこの額を通告する事とした。若し和泉屋がこれに同意しない時は飛脚を替える事になっている。一二月五日には上記の条件で再び交渉を繰返し、翌文政七年三月五日に至っても事態に変化はない。六月五日、同二〇日にも交渉する丈けである。

従文政七甲申歳、書林仲間年行司「出勤控」⁽²⁷⁾三拾六番によると、七月二〇日に和泉屋の件について仲間で取究めて惣触書を認めている。ついで八月五日には飛脚状賃の事が極まり証文を認めて裁配帳に印形をとり、和泉屋には証文印形のため来る二〇日、本人出頭を求めている。結局閏八月五日に和泉屋は裁配帳に捺印して始末がついた。その内容は明らかでない。

このように駄賃についての交渉は長期にわたり難航している。ところで閏八月二〇日には実語教童子訓二丁張式枚、書状蔵四丁張式枚、文ノ下書二丁張大小二枚、新方八略四丁張老枚の板木を式箇とし書状を添えて和泉屋により二二日に京行司中に為登る事としている。板木を取扱っている訳である。

京飛脚名前譲渡について、一二月二〇日に和泉屋は和泉や儀三郎に譲り改めたので、本屋仲間行司は儀三郎に従来の申定を申聞せ、来酉年正月一日の初寄合に印形持参を求めている。

翌文政八年正月一六日に儀三郎を呼寄せ、従来弥右衛門から取置の書物等を承知させ、改めて儀三郎の印形をとっている。

さて安政三丙辰年正月、大阪書林仲間「仲間触出留」⁽²⁸⁾によると慶応三卯年八月付、本屋年行司「通達」で、仲間中の諸荷物請負の京飛脚福田屋喜兵衛が慶応二寅年に賃銭直増を願出た。今回再願し、諸色下直迄として第四表の賃銭

第4表 慶応3年京飛脚福田屋請負大阪本
屋仲間賃表

紙	包	類	1貫目に付	300文替
紙	包	類	100目まで	100文
本		櫃	10貫目以上	250文替

第5表 慶応4年京飛脚福田屋請負大阪本
屋仲間賃表

書	状	1通=付	38文
店	走	1通=付	120
出	走	1通=付	250
荷	物	1貫目=付	350
早番便		1貫目以下 100目=付	150
早番便		1貫目以上 100目=付	130

を申出たので聞届けている。これは和泉屋から福田屋に名前譲渡が以前にあった事を示している。

また慶応四辰年二月付、年行司「通達」には前記三年八月の願に続いて、福田屋は往来人足賃直上げを理由に今回直増を願出た。止を得ない事情として第五表の通り聞届けている。第四、五表は賃額が異なるので二段階に直上げが実施されたと考えられる。書状にも普通と店走り、出口走がある。最後のものが具体的に何かは明らかでない。紙包の他に荷物と本櫃は区別されている。荷物にも普通便と早番便がある事がわかる。幕末の物価上昇の反映で直上げしたと考えられる。(補1)

四 京飛脚大坂屋と京都鍵屋小野権右衛門

宮本又次「小野組の研究」⁽²⁹⁾は小野専一家文書により、奥州下し物渡世、鍵屋小野権右衛門が大坂と京都の各大坂屋を飛脚問屋として利用し、それに融資して支配下に置いた事を詳細に研究されている。宮本氏の御好意により同文書を見る機会を得たので、明和―天明期の大坂屋の相統、両都の關係、小野とのつながりについて考えたい。それについて宮本氏の研究から教示をうけた事を銘記しておきたい。

なお大坂の京飛脚大坂屋は七郎右衛門と名義が固定している。京都の大坂飛脚大坂屋は明和五年戊子春三月吉旦、

博昌堂序「明和新曾京羽二重大全」⁽³⁰⁾卷三と、天明四年十一月、青雲館序「天明新增京羽二重大全」⁽³¹⁾卷三には名前は七郎右衛門とあり、京坂両店名前は区別出来ない。

明和八年卯正月付、大坂屋七郎右衛門、升屋彦七、丹後屋三郎兵衛、堺屋義兵衛、大坂屋小三郎、かき屋治左衛門、大坂屋庄兵衛、大坂屋長兵衛宛、りく「一札」によると、りくは同年以前に家屋敷、商売株を七郎右衛門に譲渡しておいたが今回不縁となったので、七郎右衛門が手を引くべきだが、親以来の事であるからと、りくと一家が七郎右衛門による営業を希望し、七郎右衛門が当る事になった。同年以前の史料がないので、りくが何者か明らかでない。

同八年卯二月九日付、鍵屋権右衛門宛、大坂屋七郎右衛門、証人京都亀屋喜兵衛、同京都丸屋久兵衛「一札」は、先代七郎右衛門所持の家屋敷カ所、諸道具、飛脚株共に今回りくから譲請けたが、家附借銀処理のため鍵屋から七郎右衛門は借銀し、前記の物をこの引当にしている。

この間の事情を同八年卯一月付、大坂京飛脚御仲間中・御連印中宛、京都大坂屋七郎右衛門、大坂屋治左衛門「家業書入銀子之事」(京順番仲間行司奥印)は、借銀は銀二一貫目であり、これは大坂引合店道修町四丁目大坂屋太郎右衛門が大坂の仲間連印で他借し、仲間には同人家業が引当となっている。九月に同人が家出し、二月二日に家財闕所となり引合店がなくなった。そこで道修町四丁目伏見屋門吉貸家大坂屋次左衛門方を京の大坂屋七郎右衛門名義で勤める事とし、借銀は京の大坂屋が引受ける。連印中への引当は従来通りとする旨の家業組合銀子引受証文が作られている。太郎右衛門が、りくから譲受けの七郎右衛門に当るのではあるまいか。今後研究したい。

三年後の安永二年巳九月付、和泉屋七兵衛宛、大坂屋治左衛門「一札」によると、前記明和八卯年から京飛脚渡世になった大坂屋治左衛門は、翌安永元辰年に京飛脚仲間御株願をし、仲間がこの処理でもめたが、和泉屋七兵衛の取

扱いで御株入し渡世可能となった。ついで七郎右衛門と改名を仲間から承知された。そこで家業筋と名前名跡の件は、和泉屋の差図次第とする事を約している。

ついで同五年申十一月二八日付、京都御本家大坂屋七郎右衛門宛、大坂屋七郎右衛門、鍵屋治左衛門「一札」では、大坂の大坂屋名前は京都本家に差図次第即刻譲り戻す。他所借銀は和泉屋与助、加判肥前屋新助が銀一貫目、大和屋吉右衛門、加判大坂屋与助が銀五〇〇目、合計銀一貫五〇〇目のみであり、これは七郎兵衛から済ましている。七郎兵衛も大坂屋ではあるまいか。

翌同六年六月二三日付、京都御本家大坂屋七郎右衛門、同おとき、中路長右衛門宛、道修町四丁目大坂屋七郎右衛門、同伴次助「一札」は大坂で名前退の件が、京都大坂屋から願上げ出入となったが和談し、大坂側に勤功として白銀五〇枚が渡され身分退が納得された。なお名前の件で同五年冬に七太郎に譲るべきだったかもしれないが、彼は先代七郎右衛門が存命中眼鏡に叶わず不縁となっているから、京側が不賛成となった点を大坂側が承知した。前記他借銀一貫五〇〇目は京都本家が処理し、これ以外の借銀は認めない事にして名前退証文ができている。

また同六年付、家主天王寺屋徳兵衛宛、京都大坂屋とき、同伴七郎右衛門、中路長右衛門「一札之事」は、京の大坂屋が大坂引合店は自己の店と申立て出入となり、和泉屋七兵衛が挨拶に入り内済し、帳面、諸道具共に京側が受取り申立が確認された。大坂店は他国持の店となるから暫く代番二人をおき、仕舞の出来る迄大坂の七郎右衛門が同家するとしている。ここにも和泉屋が出て来るが、これと鍵屋との関係は明らかでない。

前記の七太郎が何者かは、同七年戌三月二八日付、大坂屋七郎右衛門、同長右衛門宛、願主京都大坂屋佐兵衛、同同居七太郎、七太郎母りく「一札」(証人大坂天王寺屋徳兵衛)で、大坂屋佐兵衛は先名前七郎右衛門を改名した安右衛門を相手取り同六年に飛脚株につき出入に及んだが大坂屋七郎右衛門から金一〇兩を渡され願下げている。七太

郎母りくは前記明和八年「一札」のりくではあるまいか。

さらにこの点は同七年戊三月二八日付、大坂道修町四丁目大坂屋七郎右衛門、京都同長右衛門宛、大坂屋七郎右衛門名前改名安右衛門、引取（京清水坂寄町目則安右衛門忤）鍵屋治左衛門「一札」に、勤功銀を貰った者が処理出来なかった点を詫び、安右衛門は京都に引退するとある。この鍵屋は明和八年に、りくの「一札の宛名人と同名であり、従来からの旧株主、小野家側の株主とが出入りとなったのではあるまいか。

このように大坂引合店は大坂屋の持店であるが、安永七年には京の大坂屋七郎右衛門に小野の別宅がなっている事実がある。即ち天明元年丑九月一〇日付、小野権右衛門宛、七郎兵衛「一札之事」によると、七郎兵衛は安永六酉年正月に小野家で別宅を仰付けられた。彼は幼少の時から奥州南部の店に勤め、南部住を命ぜられたが、上方住を希望して上京した。同七戌年正月に京都柳馬場鮎葉師下ル町大坂飛脚屋の大坂屋飛脚株、家屋鋪、諸道具等迄を新宅として譲渡され、元手銀も渡され営業したが、近年は病身になったので退身して薬用養生を願い、跡式は大坂出店の七郎右衛門忤に譲渡が許可された。この忤が前記同六年「一札之事」にある京都大坂屋ときの忤七郎右衛門と同一人物ではあるまいか。

再び天明元年に戻ると弥兵衛、喜兵衛、利兵衛の三人が奥印している。

大坂屋七郎右衛門と七郎兵衛との間で次の譲り戻し証文が作製された。即ち

一札之事

一貴殿若年ニ付我等主人権右衛門殿御厚恩之御世話ニ由、去ル戌ノ正月入家仕、是迄無滞相統致来候所、我等病身ニ付万端行届兼、商売筋者不申及、其外諸用相勤難候ニ付、此度貴殿江戌ノ年譲り請候通、飛脚株并ニ居屋鋪、諸道具不殘、無相違譲り戻候所実正明白也、然ル上者他人同様ニ相成候、以来貴殿如何様ニ相統被致候共、其親

類縁者ハ不申及、其外他所ハ妨申者毛頭無之候、勿論我等引請相統致候内、何ニ不寄諸掛り合難渋申掛ケ候者有之候者、我等方江引請、早速埒明、貴殿江少茂御難相掛申間鋪候、為後証之譲り戻シ一札仍而如件

天明元丑

七郎兵衛團

九月

大坂屋七郎右衛門殿

七郎右衛門が若年のため小野の別家が入り、譲り戻し後は両者は他人同様の関係になるが、入家中の関係事は処理を引請ける事になっている。

つぎに小野権右衛門と大坂屋七郎右衛門との間には次の証文がある。

預り申銀子之事

一銀貳拾七貫七百目也[㊤]

右之銀子要用ニ付、慥ニ預り申所実正明白也、御返弁之儀七月、極月兩度ニ多少出精之上、急度返納可申候、万一相滞り又者皆納相済不申内、私相果候か不埒仕候ハ、何時成共私居宅家屋鋪一ヶ所、飛脚株并ニ家附諸道具等、不残御引当ニ御売払、其銀子ヲ以右借用銀御請取可被下候、其時一言之子細毛頭無之候、尤古券状尙通差入置申候間、親類、縁者、他所ハ妨申者一切無御座候、為後証仍而如件

大坂屋七郎右衛門[㊤]

天明元年

駄屋町通錦小路上ル町

丑九月

証人 亀屋喜兵衛[㊤]

小野権右衛門殿

京飛脚仲間について(藤村)

即ち家屋敷、株、道具、沽券状を引当として銀二七貫七〇〇目が小野家から大坂屋に貸付ている。この両証文は厳密には大坂での事ではないが、同様の場合は大坂にもあったと考えたい。

なお天明元年丑一〇月七日付、小野権右衛門宛、七郎兵衛「覚」によると、金一〇〇両が元手金として小野家から株を譲り戻した七郎兵衛に渡されている。

この他に未年一二月一七日付、小野権右衛門宛、大坂屋七郎右衛門「口上書」は、長患を理由に七郎右衛門は悴宗兵衛に名前譲りを願っている事実がある。結果は不明である。

以上の通り京、大坂の大坂屋七郎右衛門は京都鍵屋小野家の支配下であり、京都が本店となっている。

ところで天満屋ではないが、通信博物館に一通の封状がある。表に「京竹屋町東洞院西へ入 二文字屋利兵衛様 従大坂 大急用貸済」、裏に「メ四月廿三日 吉野屋嘉八」と記るし、両面に「天満 西田屋」の印、表の左上にある赤色紙に「全 店走判入用」の印が捺してある。これは京飛脚西田屋取扱書状で、店走判入用とは、赤紙と大急用の文言からみて早便の事ではあるまいか。適当な箇所ではないが記しておく。

五 京飛脚京屋清右衛門

国立史料館所蔵、日本実業史博物館旧蔵、天保三年壬辰正月、京屋清右衛門「判鑑帳」は明治迄使用されたもので、「文久童」の印があり書店から購入されたものである。

天明八申年改「京飛脚仲間定帳」によると、京屋は文政六年に株を取得し、同年は京屋栄治郎、ついで京屋六之助、文政一一年に京屋清右衛門であり、同名儀で嘉永三年に張紙があり、二代目清右衛門で明治期に至っている。

「判鑑帳」には覚として

一 印形者至而大切之物ニ候間、銘々等閑之執扱無之様氣ヲ付可申事肝要也、自然紛失致候歟、亦ハ途中ニ而取落シ候ハ、御公儀様江早速御届可奉申上候事

と序文がある。事実、印鑑を営業途中で紛失している。つぎに「」に判文字、（）に書入れを示して紹介する。

1 実印 「実印」「定利」「鄭」、「(二代目清右衛門実印)」「定行」「清」(嘉永三戌八月廿五日と)

2 店受取判 「(」(金京清金銀請取)」、「(」(金京清金銀不用) (此印形不用、印悪敷相成候ニ付亥九月八日限ニ而仕替

江)、「(」(金京大請請取)」、「(」(京清)」、「(」(金京清請取)」、「(」(金引合)」、「(」(金封)」、「(」(京清金銀請取) (天保十一子八

月と用之)」、「(」(金大坂京清金銀請取) (天保十五年辰八月朔日と用之、此印形嘉永五年子十二月切ニ而所持内江預り

置)、「(」(金京清) (弘化四年丁未十月廿一日と用之)、「(」(京飛脚京清) (嘉永二年乙酉四月四日と)、「(」(金京清金

銀不用) (嘉永四亥年九月十日と持入ル)、「(」(大坂京清金銀請取) (嘉永六丑正月持入ル、清右衛門)、「(」(金大坂京

清金銀請取) (右同断、衆七)、「(」(大坂京清金銀請取) (右同断、甚兵衛)、「(」(金銀不用京飛脚大坂南江戸堀宅丁目

京屋清右衛門) (嘉永七寅二月廿五日と)、「(」(金請取)

3 東判 「(」(東京大) (此判西六月取落ス)、「(」(東京清) (此判天保八酉年六月十三日と用之、戊三月十一日紛失)、

(」(東京清) (此判戊四月七日と用之)、これは(」と同じ判である。

4 西判 「(」(西京大) (此判大ニ損し申間戊四月と相止不用)、「(」(西京清) (戊四月八日と用之)、「(」(京清西)

(弘化二巳四月と午九月卅日落奉願上候) (午十月と用之)、「(」(西京清) (明治三年年八月廿六日と)

5 南判 「(」(南京大) (此判嘉永二酉十二月廿八日紛失奉願上候)、「(」(京清南) (此判嘉永三戌正月十七日と用之)

(丑二月落し奉願上候)、「(」(南京清) (嘉永六丑三月十三日と)

6 北判 (一)〔北京清〕

7 中判 (一)〔中京清〕、(二)〔中京清〕(此判天保十四年卯七月十七日)、(三)〔京清中〕(弘化二巳四月)

8 天判 (一)〔天京大〕(天保八)〔此判酉九月取落ス〕、(二)〔天京清〕(天保八年酉十月六日、用之)

9 辰巳判 (一)〔巽京清〕(酉八月二日紛失奉願上候)、(二)〔辰京清〕(酉八月十二日、改用之)、(亥十月七日途中落、

同廿一日奉願上候)、(三)〔辰廻京清〕(亥十二月十九日、改用之)、(丑五月廿五日損事)、(四)〔辰京清〕(丑七月廿一日

、(途中ニ而落、巳七月十八日奉願上候)、(五)〔辰京清〕(八月十四日、此印)、(六)〔巽京清〕(申七月朔日、

10 海部判 (一)〔かい京大〕(安政五年十一月廿九日途中而落十二月二日奉願上候)、(二)〔海京清〕(十二月十二日、

此印)

11 出口判 (一)〔出京清〕(天保九)〔此判戌十月取落し紛失御願奉申上候〕、(二)〔出口京清〕(此判戌十一月、用) (此ト巳十月

紛失御願)、(三)〔出京清〕(弘化三年午五月)

12 出張判 (一)〔倉出張京清〕、これは嘉永七年以降と推測される。

13 店帳合判 (一)〔倉大坂京飛脚京屋清右衛門〕、(二)〔京飛脚大坂西横堀通權屋町筋角京屋清右エ門〕、(三)〔倉引合〕、

(四)〔倉先私〕、(五)〔倉引合〕、(六)〔倉引合カ〕、(七)〔倉〕(読不明)

14 助廻り判 (一)〔助京清〕

15 宰領判 (一)〔倉宰領丈助〕(嘉永七寅五月上旬)、(二)〔倉宰領治助〕(嘉永二一四年の間と推測される。)(三)〔倉宰

領定七〕(嘉永七年以降と推測される。

16 刻改判 (一)〔子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥〕、(二)〔倉改〕、共に(天保十一年子九月、用

之)

17 (不明判) 二種ある。

以上の判のなかで12 16 17は私が付けた判名である。これらは実印からすれば、定利、定行二代の印鑑である。暖簾印は金と△がある。店受取判には金銀不用と金銀請取及び単なる請取がある。この受取判と東、西、南北、中、天、辰巳、海部、出口、出張の各判との関係は明らかでない。

天保一二年辛丑年正月、浪華江南外史楠里亭其樂輯「増補大坂町鑑」は北組、南組、天満組と組分し、明治三年庚午春三刻「増補大坂町鑑」は東大組、西大組、南大組、北大組の四組に分けている。また海部町、出口町も存在するから、出張以後は大坂を地域別していると考えられる。従って集配荷が地域別に実施されていたのであろう。

店帳合判の種類からすれば帳簿組織があったと考えられるが、私はまだみた事がない。再び受取判で嘉永六年に清右衛門、衆七、甚兵衛が別々の判を使用している。この時期に至って奉公人が増加するのか、それとも以前には区別がなかったかも問題である。それに関連して宰領の丈助、治助、定七も宰領名が固定して増加しているのか、それとも宰領が交替して一人のみであるか、これも又問題である。

刻改印判は恐らく早状の請負時刻を表わすためのものではあるまいか。その他に最後の丁に天王寺屋治兵衛と天王寺屋安兵衛の印鑑が貼付けてあるが、天王寺屋が何者か、また如何なる関係かも不明である。

京屋はこれらの判を使用して営業したが、実態は今後なお研究する必要がある。

以上で京屋の大坂での経営の一端について記した。つぎにその取扱地域等について考えると、三井文庫蔵、文久四甲子年、京屋清右衛門「京飛脚年中定」によると出店は京三条柳馬場角、明石屋清五郎である。

1 京飛脚 その休日は第六表の通りである。その外に七月には一二日は「金銀手形入御状仲間組合せ正八ツ時限り別仕立差立申候」とあり、一二月には二八日は(小ノ月ハ二七日)同様の記述が見られる。この京飛脚とは京都とそ

第6表 文久4年京飛脚京屋京便休日表

正月	元日 2, 3, 10, 14, 15, 16休
2月	休日なし
3月	朔, 2, 3休
4月	休日なし
5月	3, 4, 5休
6月	6, 13, 17, 22, 25, 30小ノ月ハ29
7月	11日限り, 13, 14, 15, 16休
8月	休日なし
9月	7, 8, 9休
10月	晦休小ノ月ハ29日
11月	休日なし
12月	27日限り小ノ月26日, 29, 30休小ノ月ハ28, 29

市、桑名

9 尾張 名古屋 (半日)、犬山 (三、八)

10 摂津 尼ヶ崎、灘目、兵庫、有馬、住吉、平野、池田、伊丹、富田、茨木、高槻、三田、并川西往来筋

11 河内 八尾、久宝寺、并南河内、守口、牧方、京往来筋

12 和泉 堺、貝塚、岸和田、佐野、岡田

13 大和 南郡、郡山、初瀬、并国中、川つら

14 紀伊 若山、湯浅、日高、田辺、高野山、粉川

の道中筋を示すと考えられる。

つぎに東国筋、西国筋、北国筋飛脚出所として

2 江戸井ニ東海道筋 (三、六、九、十ノ日休)

3 加賀井ニ越中 (三、八)、能登 (小ノ月廿七日)

4 越前 福井、丸岡、三国、府中 (十日、廿日、卅日)、敦賀 (三、

八)

5 若狭 小浜、北方、熊川 (毎日)

6 近江 大津、八幡、長浜、八日市、中郡、高島郡 (毎日)、日野

(二、七)、彦根 (二、五、八)

7 美濃 大垣 (一、六)、岐阜、竹ヶ鼻 (五、十)

8 伊勢 津、松阪、山田 (三、六、九、十休)、白子、神戸、四日

15 播磨 明石、姫路、高砂、室、三木、赤穂、竜野、并中国往来筋

16 丹波 亀山、福智山、笹山、園部

17 丹後 宮津、田辺、一日狹

が記るされている。これらは但馬を除く近畿と、北陸及び美濃、尾張の城下町、在町、それに東海道を通しての江戸である。従って名称は京飛脚であるが、京都以外も大坂の都市柄を反映している地域に連絡がある。西国筋とは余り関係は見られない。

最後に仕立時限飛脚は何時でも差出す事、生魚類は三―五月は昼八ツ迄に持参されたい。別段早飛脚は差立てる。金銀と手形入は店迄持参を願う、尤も八ツ時迄に御使を下されば別段受取を差出すとしている。なお駄賃先払は一切御断りとしている。

つぎに京都の出店明石屋の取扱地域を、天保初年と推測される京都「諸州国々飛脚便宜鑑」⁽³³⁾で考えると、明石屋六兵衛が属する大坂順番飛脚所は西国筋并ニ江戸大廻シ河内取次とある。西国筋とは因幡、伯耆、出雲、石見、隠岐、播磨、美作、備前、備中、備後、安芸、周防、長門、紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊予、土佐、筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、薩摩、奄岐、対馬であり、河内取次とは牧方、守口、八尾、久宝寺、平野、古市、富田林、右道筋となっている。西国筋つまり中国、四国、九州が京飛脚にみられない地域であり、近畿が殆んどない。

この大坂の京飛脚と、京都の出店との地域差が、具体的にどう取扱われたかは明らかでない。
以上で経営の個別例を終る。

六 天明期の京飛脚仲間

「株仲間前帳前書」⁽³⁴⁾卷二の京飛脚仲間株前書によると明和九年七月付の「定」として従来の沿革を次のように記している。

京都飛脚屋渡世（京飛脚）は内仲間であり、「京都飛脚屋之手ニ付候様相成」り難儀であるから、宝暦四戌年に表仲間（願い都合二〇（二二カ）人で相続してきた。京都で京都飛脚屋（相仕の大坂順番仲間）が今回冥加金を差上げ会所を建てたので、現在の儘では仲間と云う丈けで今後の渡世相続も覚束かないため、以後二二軒株に御定め下されば冥加金として初年度金三〇兩、翌年から一月に金一〇兩宛を上納する条件で聞届けられた。そこで株主が株譲替、変名、変宅、印形改等の場合にはその都度御断りの上で株帳に張替を申渡された。

前書であるから連判名はない。宝暦四年表仲間、明和九年冥加金上納となっている。その契機としては京都の大坂順番仲間との関係が強張されている。この事はその成立には京都側の発言力が強かった事を推測させる。

ついで文化一二年亥六月付で追記があり、前記の他に京飛脚は京都のみでなく、先年から城州の伏見、淀、八幡、それに江州の入込んだ村々にも諸荷物、書状等を届けていたが、これを申立ていなかったので、安永二巳年九月に追願して聞届けられ、毎年金二兩宛増し都合金一二兩宛上納となった。そして追願の際に元帳面にその旨を書加えるべきであったが、認め落ちのため今回新帳面に改めたとしている。ここでは京都以外の路線の存在と、それに伴う安永二年冥加金増額がわかる。

つぎに天明八戊申年改「京飛脚仲間定帳」には、最初に仲間永代申合定法之事とある。天明八年迄の経過として、京飛脚仲間は明和五年迄は船壳艘と定め種々の申合があったが、次第に統一がとれなくなり天明五年巳一月に仲間中

が破談して、九人と一〇人の二組合に分裂し、船二艘を使用するに至った。そして双方の組合の内得意争があり出入となった。また京都仲間が、別船では着舟時刻が一定せず、商売に差支る事を申立て、願人方に同心して大坂西御番所に願書が提出された。

この出入は天明八年の京飛脚仲間出入一件御請書によると、願方は(一)虎屋長兵衛(二)十八屋庄次郎、(三)天満屋六兵衛、(四)大丸屋甚之助、(五)天満屋与市、(六)山家屋大吉、(七)河内屋与市、(八)永楽屋善次郎であり、願方積入として(九)明石屋吉兵衛、(十)紀伊国屋弁吉がある。

相手方は(1)万屋武兵衛、(2)和泉屋徳兵衛、(3)長浜屋吉兵衛、(4)和泉屋治兵衛、(5)大坂屋七郎右衛門、(6)小和田屋喜三郎、(7)和泉屋治兵衛、(8)西田屋徳次郎、(9)和泉屋弥右衛門である。両者合計一九人である。

これを安永六年(天明、享和元年、天保一〇年)序「難波丸綱目」の京飛脚と比較すると四(四)(七)は見当らず、安永六年にはこれに変わるものとして(一)いせ屋次郎兵衛、(二)津むらや与兵衛、(三)京屋市兵衛、(四)会所河内屋藤兵衛がある。なお安永六年には(一)は一人二軒であるから総数は変らない。

ところで天明八年四月一五日に御奉行所に宛て請印しているのは前記一九人の他に(五)森川屋乙蔵が加わり二〇人になっている。彼が何れの側に組したかは不明である。なお京都の京都順番飛脚仲間年行司二人、惣代一人も請印している。

つぎに後述する実際の仲間永代申合定法に同年八月付で連印しているのは(三)(四)(六)(一)(八)と、(五)塩屋忠兵衛、(六)舩屋作二の一人である。最後の二人が預方、相手のいずれの系統かは明らかでない。結果的には相手方の納得する線で出入は決着したのでろう。

この天明八年申合連印一三人と寛政一二年「大坂と京都迄登船独案内」の京飛脚一四人と比較すると、(三)(四)、(六)(山

家屋利蔵があり、新らしく(四)神崎屋市右衛門がみえており、(2)(3)(四)(五)がなくなっている。また(一)虎屋長右衛門、(五)天満屋与兵衛が当時休である。

この間の事情を申請印の定帳には株の譲渡等で張紙があるため照合すると、(一)は定帳には全くない、(五)は前記天満屋の営業からすれば株主としてはないが、実体は存続しているだろう。(六)は見当らない。(四)明石屋は(3)長浜屋が文化一四年以前に明石屋となっているからである。(五)(六)は営業が続いており、(三)は前述の事情である。(四)は見当らない。

この事は京飛脚仲間以外にも同業者が存在し実体にそれ程の差はない事を示している。

再び出入一件御請書によると、得意先競取と荷物積船等についての口書は手続についてのみである。即ち願方からは永代帳、仲間申合の証文により仲間定法との点を申立て、相手方からは明和五子年の帳面に古来からの申合が種々あるがこれが乱れているため今後改めるとある点を申立て、それ以前の申合は不用として争っている。

そこで右の帳面、諸証文(私はまだみていない)と御改の結果、「元極」の帳面証文にみられる連印者は死失、株譲のため老人も残っていない。従ってこの帳面証文は御取用にはならない。また株入に際して定帳面に印形を取る事が守られていない事が指摘される。

さらに仲間法として双方から申立て出入となった事は、我意を応募り仕方心得違の事とされる。それは仲間法とは申合次第のものであり、不埒の事がなければ御奉行所からは御沙汰の筋になるものではない。特に(二)十八屋庄次郎と与市(五)天満屋か(出)河内屋か不明)の得意先を(1)万屋武兵衛と五兵衛(2)代判カ)が競取ったとの証拠もない。その上に前二者が難儀となったら後二者が得意先を差戻すと云ったから申分はない筈である。それを徳意預り証文、賃銀割符等の事について元の申合を引張り出して争っているのは理由にならない。

荷物積船の事は手引船一艘と従来規定があり、式艘積出は新規の事で不埒だから前に戻す事とされた。

第7表 御公儀宛京飛脚仲間御礼金表

兩	奉	行	銀2兩宛
兩	御家老4人		2.00宛
地方	御与力4人		3.00
地方	御同心4人		1.00
惣財	御与力2人		3.00
御目附	方2人		2.00
三郷惣	御年寄14人		2.00
三郷惣	代衆中	3兩(1包)	
三郷惣	会所守中	3.00宛(1包)	
産物	書衆中	2兩(1包)	
三郷惣	代若イ衆中	3兩(1包)	

京飛脚仲間について(藤村)

これらの事は株召放に該当するが心得違もあるので御用捨となり今後の注意を申渡されている。また京都順番飛脚仲間は京都で株を御差免になったのであり、大坂の飛脚屋とは別段の事で土地違として御沙汰に及ばないとされた。これで沿革と出入一件については終り、仲間永代申合定法の内容を紹介する。

1 (先行申合との関係) 前記の請印の結果古来からの申合は無効で、この帳面一冊に限り有効である。

2 (冥加金) 明和九年七月願株二二軒で御免となり金一〇兩宛上納、ついで伏見、淀、八幡、大津迄の道中筋の株に願増し聞届けられ金二兩増、従って金一二兩を毎年上納する。

3 (御公儀宛年頭八朔御礼入用金割方) 毎年勤めるが内容は第七表の通りで、行司が収集め上納する。商売休株はこの割合を出金しなくてよい。

4 (他人宛借株として他家での商は不用) 仲間株は御免株となった時に御公儀様御株御帳面に銘々の住所、家号、名前が記るされているので、各自の名前を他人に借した株と称し他家で商売をしない事。

5 (災害弁償) 船中、道中での風雨などによる故障で弁済が必要となり、その額が身軀以上の場合には所持株と仕似の家督を譲渡してこれに宛てる。そのため御株の質物は行なってはならず、勿論仲間奥印も、銘々の名前を質物に入れてはならない。

6 (御株を相続する場合) 所持株を忤か、親類に譲る際は一家証拠判で天明八年改の申合である仲間定法を守る旨の証文を仲間提出する。その際に行司両人が立会い仲間定帳の趣旨を読み聞かせ仲間中銘々の扣帳に印形を改

第8表 株譲替祝儀金表

仲 会 会 会 持 行	所 所 所 所 子 司	間 守 女 守 家 共 人	仲間内	他人宛
			金 100 疋	銀 5 枚
			銀 1 両	1 枚
			3.00 匁	2 両
			2.00 匁宛	1 両宛
持 行	子 司	共 人	2.00	2 両宛
			※3.00	* 金 100 疋

※ 三井本、大阪商業史資料は銀 5 匁
* 実業史本は上に金 1 両と貼付

めてとり、顔見世の上で御公儀様御帳面に張紙をする事。

7 (御株仕にせ家業を他人に譲渡する場合) 他人宛譲渡には行司が仲間に通知し譲り請主の町所を尋ね調査し、一同得心の上で張紙をする。

8 (御株を京都の仲間内へ譲る場合) 京都の相仕に譲渡申出の者があれば、当仲間中全員寄合で相談し、老人でも差支の場合には譲ってはならない。

9 (御株譲り替祝儀) 譲替の祝儀金は仲間内の場合と、株と仕似を他人に譲る場合とは相異がある。金額は第八表の通りである。前者の場合に名前人が幼少の時は代判のため仲間宛銀二両を要する。なお代判替に際しても祝儀と銀二両を同様に提出する。

10 (銘々請持の得意競取の禁止) 得意競取りの場合にはその旨を仲間知らせ、元の請持の駄賃直段で元請持との取引に復するようにする。それ迄は競取った者を船中、道中組合から除く。

除かれた者がなおも仲間の得意を競取った際は町所に掛合い看板、掛行燈を仲間に取り取り商売を差留める。
得意先の側から機嫌をそこねて立入を差留られた場合、若し不可抗力の際には別の者が変わって請負ってはならない。請負金銀荷物について不埒があつた際には変わっても差支ない。

11 (荷物積場所) 従来から道修町東浜である。風雨難船には仲間一統で弁明し、途中での紛失等は理由により一統から説明する。

12 (荷物貫目の送り状による会所帳面記載) 荷物貫目は、送り状により正直に会所帳面に記入する。時々兩人宛で、勝手に上下共に申合せて貫目改をし、その際に実際と一〇貫目以上の差がある場合は老貫目につき一日一夜の別

船とする。

12 (奉公人) 銘々が召抱の奉公人に晦を出した時に仲間内でその者を召抱えてはならない。若し違反した者は別船する。

13 (五節季算用日定) 二月五日、四月二五日、六月晦日、八月晦日、一〇月二五日、一二月二〇日を定日とし行司、船主、仲間中が立会で勘定する。

14 (借請け船) 従来から過書下小三拾石の名代五ノ組三右衛門、六ノ組八兵衛の二艘を仲間中で借請け荷物を積み手引舟になぞらえてきた。荷物積入方は四五〇貫目で、それ以上は一〇貫目につき錢四八文替で舟方に渡す。船賃錢は五人加子で、錢相場九一二匁で錢四貫一四八文、錢相場一二匁五分一五匁で錢三貫八〇〇文である。舟賃は行司が集めて船方に渡すべきだが、舟主が家別に取集める。会所入用が滞った際には掛りからその旨申出れば舟賃出錢

滞が済む迄組合を除き別船とする。別船にされた者が他に同志を募れば商売を差留める。

15 (会所家賃、船合羽代、会所定入用) 会所家賃銀は半分は顔割、半分は荷物貫目割とする。船合羽代も同様である。会所入用などは第九表の通りであり、六月六日、同一四日に遣す事になっている。

16 (駄賃定) 道中筋として野江、内大、関目、森小路、今市、土井、守口、大切、十番、佐田、志め野、当麻、木屋、松ヶ鼻、出口、牧方、天野川、三厨、渚、

第9表 会所入用、諸祝儀表

(会所定り入用1ヶ月分)	
荷物掛ヶ番料	錢2,500文
出口支配料	500
才布支配料油代	1,000
(会所へ二季祝儀)	
茶 料	1,000
会 所	1,000
女 房	500
持子中	1,000
(道中二季祝儀)	
伏見船役所役人中	1,000
淀馬差	500
淀宰領宿掛番料	1,500
(船頭加子祇園二季祝儀)	
二季仕廻立年分之祝	
儀加子	1,000文宛
舟頭兩人	1,000
祇園立舟弍艘	1,000

第10表 駄 賃 表

道中筋書状賃	錢16文
八幡山坊中	24
淀伏見, 下鳥羽, 上鳥羽	16
大 津	18
京 都	18

下嶋、上嶋、坂村、楠葉、橋本、八幡があり、これを道中筋として淀、伏見、大津、京都への駄賃は第一〇表の通りに定める。

しかし実際には銘々請持の得意により駄賃に差がある。それは年間用向を平均して計算するからであり、この金額を見込んだり、駄賃引下げによる得意争奪をしてはならない。

17 (道中宿々賃錢の払、道中書状荷物の付錢定、出口割方の仕法書) 会所に別帳耆冊扣がある。

18 (宰領) 毎夜船耆艀に四人宛を仲間惣中が雇う。隔日勤めで都合一二人から仲間へ証文をとる。若し仲間衆の意向に添わない時は速かに差替えて決して雇わない。

19 (右の口々申合以外の問題) 仲間全員により処理し、御公辺に及ぶ場合も仲間で相談の上

でする事。

以上で内容の略記を終る。この京飛脚仲間定帳は仲間帳と定帳が合体した性格を持っており、定帳に当る部分は名称からしてこの規約は奉行所の承認を経ている。つぎに仲間帳に当る部分があるが、定法の6 (御株を相続する場合) に記した通り株の移動などに際して張紙をするが、三井本、実業史本を比べると両者共に完全に実施した訳ではない。明治二年の張紙があるから同年迄一貫して使用されている。

七 嘉永・安政期の京飛脚仲間

天保一三年に株札井問屋組合等が停止され、ついで嘉永四年に再興された。京飛脚仲間も当然その影響をうけており、嘉永三庚戌年四月改之「京飛脚定目」、同四辛亥年三月「京飛脚仲間名前帳」、安政六未年九月「取極申定帳」は

名称にこの間の事情があらわれている。⁽³⁵⁾この三冊と前記天明八年「京飛脚仲間定帳」により、天明期から明治初年迄の仲間株の動向をみると次の通りである。名儀変更のみ屋号名前を記るし、相統等同一屋号の場合は（ ）内に名前を列記する。名前が変わらない場合は記るさない。

1 万屋武兵衛（まち、武三郎、武兵衛、駒蔵）

2 和泉屋徳兵衛（得右衛門、徳右衛門）、天保九年以降は4和泉屋治郎兵衛貸家で営業となっている。

3 長浜屋吉兵衛 文政六年以前に明石屋吉兵衛（寅吉、吉兵衛）、文政六年に明石屋が仲間定法に背いたので願上
げて株仲間一統に預り惣持となっている。同年京屋栄治郎（六之助、清右衛門）が取得している。

4 和泉屋治兵衛（治郎兵衛）

5 大坂屋七郎右衛門 明治三年淀屋七兵衛

6 小和田屋喜三郎（利右衛門、猶治郎、孝治郎、市太郎）、元治元年難波屋惣右衛門

7 和泉屋弥兵衛 文政七年泉屋儀助、天保三年福田屋藤治郎（永之助、嘉次郎）

8 西田屋徳松（徳八、徳蔵、得蔵、徳兵衛、本次郎）

9 和泉屋弥右衛門 文政七年泉屋儀三郎、天保三年福田屋吉兵衛（信兵衛、吉兵衛、孫三郎、ゑい、孫三郎、藤治郎、永之助、嘉次郎）、なお7、9共に安政四年には前者は福田屋ゑい代判徳蔵、後者は福田屋藤治郎代判利兵衛が相統の「仕似せ家業」を本家福田屋太七から預っていたのを差戻し改として、前者は福田屋孫三郎、後者は福田屋永之助代判利助となっている。福田屋両株と本家との関係は今後研究したい。なお万延元年には京屋清右衛門借家で住居している。

10 天満屋六兵衛（てる、六兵衛）

11 大丸屋甚之助

12 塩屋忠右衛門 10 天満屋六兵衛方に同居である。文政四年に病身で渡世を勤め難い事を理由に10 天満屋六兵衛に株を譲っている。なお嘉永四年「京飛脚仲間名前帳」には当時仲間持となっている。

13 舛屋作二(友二、利兵衛、利右衛門、徳兵衛)、桝屋とも書かれている。

式拾貳軒仲間であるが実際には一三軒であり、明治初年には一人、一二軒となっている。福田屋は7・9名義は同一だか店舗は別と考えられる。彼等の内で家主は天明八年には1万屋、9 和泉屋弥右衛門、10 天満屋の三人であり、嘉永三年、明治三年には3 京屋、4 和泉屋治郎兵衛、10 天満屋、11 大丸屋の四人であり、他は借屋である。

以上で各株の動向をみた。つぎに前記三冊の史料について考える。

まず嘉永三年「京飛脚定目」には次の前書がある。

一 此京飛脚条目写帳面他家江相渡、家督為引当銀子取引堅致間敷候事、依之一統奥江調印致候如件

これは天保改革の結果御免株でなくなったので定目を規定し、天明八年の仲間定帳と同じ性格を持たせたと考えられる。そして定目の内容は

1 (沿革) 京飛脚渡世は寛永度から始まり、運賃低額化と道中船中の混雑防止の対策として組合渡世を定めて元禄一三辰年二月から毎夕差立船と陸往来してきたとしている。この点は天明八年の仲間定帳には全く記されていない。時期的には定飛脚問屋がその成立について述べているのと大略合致している。大坂について考えれば寛永期は市街が大略出来、過書船、上荷船運賃の制札が建てられた時期である。元禄期には貞享三年に淀川改修工事竣工、元禄一一年残部工事完了のため河村瑞賢が来坂し、また同年には三都定飛脚問屋が毎夕定期の発着となった。翌一二年に瑞賢は歿し、堀江川が出来ている。これらの大坂の市街地、交通路の整備が背景にある。³⁶従って京飛脚と淀川交通と

は密接な関係がある。

2 (御法度、御触書の遵守)

3 (風雨天災による途中支障時の処理) 定法通り諸届などをし手先の者、店の召遣い人まで徹底する。

4 (船賃等入用割) 仲間中立合の上で算用して割賦し、出銭は節季毎とする。滞った際は船中道中を除く。

5 (弁償方法) 故障、盗難等で弁償が必要な時は相互扶助用の積金を融通し、借主は規定の利子六朱を加算し相対で日々返済する。飛脚取扱品は身分不相応の価格が普通だからこの積金で処理出来ない場合がある。そこで仕似の家督、諸得意を譲渡して代金を宛てる事になる。このため仕似家督の質物書入や同業内の奥印をしてはならない。違反者は本人、奥印者共に道中船中から除く。

6 (得意競取の禁止) 違反した際は船中道中から除く。

7 (請負金銀荷物に不埒の際の処理) 仲間中から荷主に断りを入れ、請負った者を船中道中から除く。

8 (延着等により他の店に用向仰付の際の託入) 請負者と、代りを命ぜられた他店とが同伴して託を入れる。聞入れられない時は用向は仲間が預る。このような際に得意先の競取をした者は船中道中から除く。

9 (陸往来働人賃金) 割賦分を日々差出す。滞った場合は道中を除く。

10 (出刻厳守) 船陸共に申合時刻に遅くれた者は待たない。

11 (浜先当番) 毎夕出勤する。代人を出す際には代勤一札を差入れる。

12 (新規、我意の行動禁止) 何事も仲間中で示談の上でし、届物を定法外の時刻に、混雑した仕方の場合は船中道中から除く。

13 (仲間宛申出の私用) 印形付書附による。

14 (示談集会) 不参の際は断っておく事、数度の不参と決議を破った者は道中船中を除く。

15 (為登荷物の宰領と不正) 宰領と談合して不正をした者は船中道中を除く。

16 (転宅) 希望者は仲間中と場所を相談する。差支る者があれば止める。

17 (出火) 近火には駄付けて請負荷や帳面を類焼、紛失から守り、鎮火後返却する。類焼の際には居所の仮宅が決まる迄、下り諸届物は届先の方角により仲間で分担する。

18 (下人) 同業内であつて雇われた事のある下人は雇わない。雇った跡で判明した時は暇を出す。

19 (帳面張紙) 仕似家徳讓替、変宅、名前替、印形改印などの場合には、別紙一札を差入れて、この帳面に張紙をする。

20 (近火の際の手引船) 川越でなく式丁四方の近火の時には手引舟屋万屋が船を廻して荷物を積入れ世話をする。仲間中の目印の高張提灯と幟、合印の法被八枚を預けておき使用する。その際に銭二貫文が手引船廻し賃で、他に白米三升を仕入る、その他に酒手等を請求しない事。

21 (手引荷物の三拾石船使用と難船時の処理) 飛脚荷物を手引荷物と称し三拾石船二艘を借切り毎夕隔番に仕立てる。道修町東堀浜から戌刻限に出船する。途中難船等の際には会所に集まり別船を借受け濡荷物を手宛する。得意方に詫入れの時には相互に助け合い聞済になる迄断りを入れる。この難船時に不参の者は船中道中から除く。

以上の通りであるが、基本的には御免株でなくなっているから、天明八年仲間定帳に比らべて冥加金、奉行所関係がないし、讓株の祝儀規定もない。しかし他に内容に重大な変更は見当らない。

つぎに嘉永四年三月に諸問屋組合再興となつた⁽³⁷⁾。同年同月「京飛脚仲間名前帳」⁽³⁸⁾はこの御触を記するし名前帳を差上げるとしており、今後仲間内の変名、変宅、印形改、その他病死、名前人代り、新規仲間加入の際には奉行所に断つ

てからこの帳面に張紙するとしている。この前書について京飛脚も冥加金銀上納免除、加入自由であり名前帳を御役所と惣御会所に差上げ、前書は御役所の差図による文言によるとして式拾貳軒仲間一三軒、内一軒は組合持が連印している。張紙は明治三年迄貼付けてある。規定は全く収録されていない。

最後に安政六末年九月「取極申定帳」は、前文として天明八年仲間定帳の成立事情とその趣旨を記るし、罰則的なものとして別船別往来の処分がとられる事であったとしている。その際に手引舟の出船が毎夜亥刻のため別船になった者は困惑して詫を入れたが、文化一四丑年から酉刻限に変更され効力を欠くに至ったので、次の事を再誓約するとしている。嘉永三年定目には出船は戌刻となっているが、この間の事情は明らかでない。

1 (前年からの申合条目) 遵守する事。

2 (得意競取りの禁止) 露顯した時は別船別往来とする。その期間中は仲間中の積入荷物の船賃、往還の飛脚人足賃は当然割高になるので、別船別往来が解けた後でこの期間中の前記二賃錢と宰領賃等は従前からの拠出額に応じ全額提出する。また和談に際し以後の懇意として乗組を頼む盃を取扱う。なお別船別往来中、一件諸入用は当人負担とし、必らず出錢する事。

3 (別船別往来中に仲間中の差支を行った際の処分) 御奉行所に願上げて看板、目印行燈を仲間に取りあげ、得意中に休渡世の旨を通知し仲間中で得意先の仕事を請持つ事とする。

この定帳は罰則の再確認と考えられる。何らかの事件があつての事と思うが明らかでない。連判者には明治三年迄の張紙がある。

天明八年から安政六年迄の規定四冊は三井本、実業史本共に四冊が纏っている点からも、規定の内容、張紙の期間などから相互に補ひ効力を共に持続してきたと考えたい。

八 明治期の京飛脚

幕末期の京飛脚の具体的な事は明らかでないが、慶応四年閏四月一五日に大監察使東下費として大阪に五〇万兩を賦課し、その内で三四万四千兩が商業仲間分である。金五〇〇兩が京飛脚屋に課せられており、これは最少額であるが、他に運輸業者の負担は見られない。⁽³⁹⁾

ついで同年四月に株仲間の存置、ついで五月商法大意が布達され、六月には諸商業仲間前帳の提出が命ぜられた。九月には株仲間加入銀の抑制が布令られている。⁽⁴⁰⁾ この間に従慶応四年辰七月、至明治二年巳二月「諸鑑札数目」によると、京飛脚仲間一二枚が慶応四年辰八月晦日に鑑札を下附された事実がある。⁽⁴¹⁾ 従来の株実人数のまま認められた訳である。

その際に「淀川筋運送問屋約定書」⁽⁴²⁾には、明治元年一〇月付、京飛脚仲間年行司京屋清右衛門、天満屋六兵衛宛、(大阪)運送問屋「差入申約定之事」によると淀川筋、大坂、城州伏見上下荒荷物運送捌渡世に運送問屋は従事してきた。つまり川船の営業に必要な運送問屋である。今回表仲間願を商法会所に提出したが京飛脚仲間が旧年御免御株仲間を理由に示談を命ぜられた。その結果京飛脚仲間から請書が出され、京都直名宛諸荷物を運送問屋は請負ず、また京飛脚仲間の営業に差支る事をしない事が約定されている事実がある。運送問屋の営業が何様に京飛脚のそれに組込まれたかは明らかでない。

その後明治五年四月株仲間は解散となり、同六年七月には飛脚営業は禁止されている。⁽⁴³⁾ この間の京飛脚仲間の動向を知る事は出来ない。

唯一の手掛りとしては住吉大社の石灯籠がある。第一図の通り一対のものであり、向って左側(A)が第二図、右



第1図 住右大社京飛脚灯籠図



第2図 京飛脚灯籠（左側）図

側（B）が第三、四図で、一部拡大したもの、左側（A）が第五図、右側（B）が第六図である。まず節の正面に「献燈」、右側「御得意繁昌」、左側「執次／田中直衛太夫」、裏面「天保十一年歳／在庚子十一月」と刻まれている。つぎに基礎には正面に「大坂」、左側に（A）「京都」、右側に（B）「大坂」、裏面に「明治廿七年／十月修覆」とある。基壇は二段あり、上には正面に「京飛脚仲間」、下には正面に「丸京合資会社」とある。

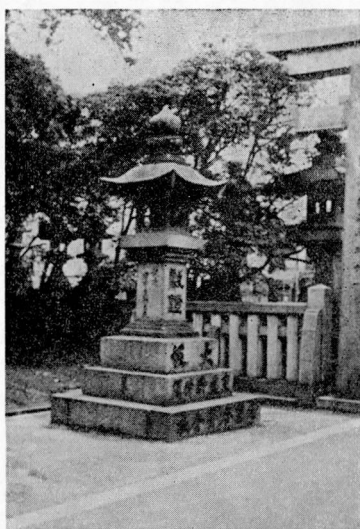
この灯籠は天保十一年一月に京飛脚仲間が御得意繁昌を願って田中直衛太夫の執次で献燈した一对であり、それを明治二十七年一〇月に丸京合資会社が修覆して基壇を重ねたと考えられる。

丸京合資会社は明治二三年に設立された丸京会社が前身だろう。資本金五千元のうち三千元に減資している。同二七年には丸京合資会社の本店の存在が確認されている。⁽⁴⁾

石灯籠は左側入口の鳥居の直ぐ脇にあり京飛脚仲間の往年の繁昌を偲ばせる。



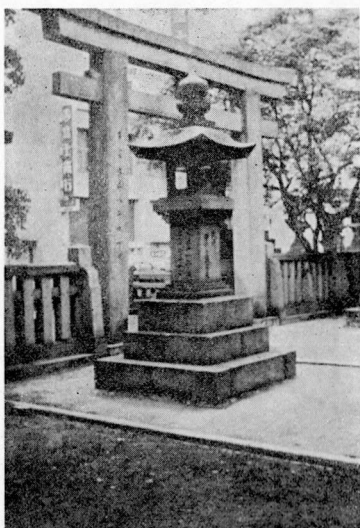
第5図 京飛脚灯笼（左側）部分図



第3図 京飛脚灯笼（右側A）図



第6図 京飛脚灯笼（右側）部分図



第4図 京飛脚灯笼（右側B）図

安永六年「難波丸綱目」⁽⁴⁵⁾には京飛脚を含めて二六種の飛脚が記載されており、畿内、北陸、江戸、長崎など取扱地域も多岐に亘り京飛脚と重なる場所も多い。しかしこれらの地域では、主として畿内に限定すると藩領は零細性、分散性があり、京大坂を主とした非城下大都市の存在と共に城下町の規模を未発達に抑えた事が、矢守一彦氏⁽⁴⁶⁾により指摘されている。その内で主として大坂と京都を結ぶ京飛脚の存在は注目されてよいだろう。

註

- (1) 「大阪市史」第一 六五五、九三九―四一頁、第二 三八、八一―一二〇、八八―七頁
 - (2) 「東区史」三卷一一六―二四、一一七〇―一頁
 - (3) 「大阪商業史資料」一五卷二二―五四丁
 - (4) 「史料館所蔵史料目録」一一集八四頁
 - (5) 安政六年「取極申定帳」を「大阪商業史資料」が無表題とし、目次で「京飛脚仲間名前帳」の一部としている事は、筆写に際しての史料が、安政六年分は表紙がない帳簿であったか、又は原本でなく既に混乱している写本であったかの可能性はある。少なくとも実業史本、三井本ではないと考えられる。
 - (6) 多治比郁夫、日野龍夫編「校本難波丸綱目」一七六頁
 - (7) 「同右」五二四頁
 - (8) 慶応義塾図書館蔵
 - (9) 国立史料館蔵
 - (10) 大東急記念文庫蔵
 - (11) 「校本難波丸綱目」一七八頁
 - (12) 通信博物館蔵
 - (13) 三井文庫蔵
 - (14) (15) 大阪市立中央図書館蔵
 - (16) 三井文庫蔵
 - (17) 京都府立総合資料館蔵
 - (18) 慶応義塾図書館蔵(幸田成友旧蔵)
 - (19) 慶応義塾図書館蔵
 - (20) 三井文庫蔵
 - (21) 京都府立総合資料館蔵
 - (22) 三井文庫編「三井事業史」資料編一 三七九、七六六頁
 - (23) 本庄栄治郎・黒羽兵治郎監修「大阪編年史」七卷三二八―三三二、三三四―四一頁、一六卷八二頁
 - (24) 大阪府立中之島図書館編「大坂本屋仲間記録」一卷五一、一二―四頁
- なお元禄八乙亥稔正月吉辰刊「書札調法記」文章替字三(目録題「手本重宝記」卷之五)の十三、万手形尽に

荷物送状
にもつくりじやう

一書物箱 式ツ

右者京都何町の飛脚何右衛門ニ相渡其元へ下シ申候則賃銀は何程ニ而此方に而払申候御吟味被相遂候而御請取可被成候為其如此ニ候以上

何月何日

何右衛門判

何左衛門殿

とある。(近世文学書誌研究会編「書札調法記」近世文学資料類從参考文献5三〇二—三頁)

書物箱は飛脚が取扱うのが通例であつたろう。

(25) 大阪府立中之島図書館蔵

(26) 「大坂本屋仲間記録」三卷三八三—五、三九七、三九九、四〇三—四、四〇六、四一五、四一七—八、四二二—三頁

(27) 「同右」三卷四二七—八、四三一—三、四四四—五、四四七頁

(28) 大阪府立中之島図書館蔵

(29) 宮本又次「小野組の研究」一卷三七二—三頁

(30) 大東急記念文庫蔵本

(31) 早稲田大学図書館蔵

(32) 有坂隆道・藤本篤編「大坂町鑑集成」

(33) 拙稿「京都『諸州国々飛脚便宜鑑』について」史料館報二六号六頁

(34) 「大阪市史」第五 七二—二頁

(35) 石井良助「商人と商取引その他—第六江戸時代漫筆—」九一頁参照

(36) 黒羽兵治郎監修「大阪編年史」二五卷八二—三、一〇六、一一三—四頁。宮本又次「大阪」日本歴史新書六—八頁

(37) 「大阪編年史」二二卷三二—二頁

(38) 「同右」二二卷三三—七頁に「大阪商業史資料第十五卷京飛脚仲間名前帳」として一部を収録している。「大阪編年史」は「大阪市史」の原典史料であるから、当然「大阪市史」は「大阪商業史資料」により京飛脚を記述したのである。

(39) 本庄栄治郎「明治初年大阪の御用金」(大阪市役所編「明治大正大阪市史」五卷五三九頁、本庄栄治郎「史的研究日本の経済と思想」二〇八—一一頁)

(40) 黒羽兵治郎監修「大阪府布令集」一卷三一、六一、六四、八六頁

(41) 宮本又次「日本ギルドの解放—明治維新と株仲間—」一〇三頁

(42) 黒羽兵治郎「近世交通史研究」二六八—九頁

(43) 「大阪府法令集」一卷五一—二、八〇六頁

(44) 「明治大正大阪市史」三卷九七—一二頁

(45) 「校本難波丸綱目」五二三—五頁

(46) 矢守一彦「幕藩社会の地域構造」二五一—四頁

附記 本稿の作製に当り国立史料館、三井文庫、京都府立総

合資料館、大阪府立中之嶋図書館、大阪府立中央図書館、

慶応義塾図書館、早稲田大学図書館、小野専一氏は所蔵史

料、図書の利用を許可された。また黒羽兵治郎、宮本文次、

田中康雄、宇田正、平山香、藤本篤、田治比郁夫、肥田浩
三、橋本輝夫、日野龍夫、宮垣克己、森中和子の諸氏のお
世話になった。記して感謝したい。なお本稿は史学会第七
六回大会日本史部会で発表したものを補足した。

付録、京飛脚関係史料

京飛脚関係史料として(一)「京飛脚仲間定帳」天明八戊申年改、(二)「京飛脚屋定目」嘉永三庚戌年四月改之、(三)「京飛脚仲間名前帳」嘉永四辛亥年三月、(四)「取極申定帳」安政六末年九月、(五)「京飛脚年中定」文久四年を翻刻する。

(一)(四)(五)は三井文庫所蔵本を底本とし、(二)は日本実業史博物館旧蔵、国立史料館蔵本を底本とした。(一)(三)(四)は三井本が張紙が多い事により底本としたが、(二)は三井本に一丁欠があるため実業史本を底本とした。共に各々実業史本、三井本により校訂した。(五)は三井文庫所蔵、外に異本が見当たらないのでこれを底本とした。

(一)京飛脚仲間定帳は三井本、実業史本共に縦約三三・九センチ、横約二三・九センチで表紙共に紙数五二枚である。四ツ目綴の上に袋綴となっており、裏表紙上から一、四綴の所に黒印があるが文字は読めない。これは表紙を除き50丁ウの「表紙共紙数五拾貳枚」に押してある「大黒講」の黒丸印と同一である。本帳簿は他の帳簿の場合であれば表紙除五二枚となるべき所、最初と最後の丁が表紙に貼付けてあるので表紙共五二枚となっている。49丁ウ50丁オ・ウは共に白紙である。

三井本はD540-4で、表紙ウ中央と裏表紙内側左下隅に「三井文庫」の朱印がある。また裏表紙内側中央下に「京

屋清右衛門」の張紙がある。そして裏表紙紙背に三井家の紋である四ツ目を中心に大正十年五月十三日購求と印書があり、側に「大阪鹿田」と朱書し、さらに「共四〇〇」と鉛筆書されている。

実業史本は No. 4—40—1 で一丁オ右上に「日本実業史博物館蔵」、左下に「文久童」の朱印がある。

両本共に49丁ウ、50丁オは白紙であり、本文は一ページ五行書、連判は二人書である。

(二)京飛脚屋定目は三井本、実業史本共に縦約三一・六センチ、横約二三・七センチの四ツ目綴である。表紙を除いて三〇丁であるが三井本は一七丁オ・ウが欠けている。共に二三丁ウから三〇丁ウ迄白紙である。三井本は D50—5 で一丁オ右下隅、三〇丁左下隅に「三井文庫」印があり、裏表紙内側には右下に大正十年五月十三日購求の印書がある。裏表紙外側左隅に小さく倉と墨書されている。実業史本は No. 4—40—1 で一丁オに「日本実業史博物館蔵」「文久童」印がある。

両本共に一丁ウ以下の本文は一ページ四行、連判は二人分となっている。翻刻の最後にある張紙は一丁の紙背に紙包として収納されていたものである。

(三)京飛脚仲間帳は両本共に縦約二八・三センチ、横約二一・三センチの四ツ目綴で、表紙を除き一五丁ある。三井本は D50—6 で一丁オ右下隅と一四丁左下に「三井文庫」印、一五丁左下隅に大正十年五月十三日購求の印書がある。一丁オ・ウ、10丁ウ、一四丁ウ、一五丁オ・ウは白紙である。

実業史本は No. 4—40—3 で、二丁オ、一四丁ウ中央に「日本実業史博物館蔵」、二丁オ右下、一四丁ウに「文久童」の印がある。

両本共に本文は五行書、連名は二人書となっている。なお翻刻の最後に示した張紙は三井本の一丁ウに貼付けてある六枚の張紙を便宜上ここに置いた。

四取極申定帳は兩本共に縦約二七・九センチ、横約二〇・五センチで四ツ目綴であり、表紙を除き九丁ある。共に一丁オ・ウ、九丁ウは白紙である。

三井本はD540-7で、一丁ウ中央、九丁ウ左下隅に「三井文庫」印、裏表紙内側右下隅に大正十年五月十三日購求と印書がある。

実業史本はNo. 4-9-四で、一丁オ右上に「日本実業史博物館蔵」、二丁オ右下「文久童」印がある。兩本共に本文五行書、署名三人分書である。

(一) 四の兩本の筆蹟は帳簿、張紙共に各各同一人物の手になるものと考えられるが、なお今後研究したい。

(国京飛脚年中定はD540-37で、昭和八年二月十六日寄託となっており、一枚刷で、紙は縦約二七・二センチ、横約三八・八センチであり、枠は縦約二三・九センチ、横約三六・〇センチとなっている。文字は朱書以外は紺色である。

つぎに翻刻はしないが、便宜上記す判鑑帳はNo. 4-9-五で、縦約一四・九センチ、横約九・七センチ、四ツ目綴であり、題簽は中央に縦約一五・六センチ、横約四・二センチの書題簽である。中央に判鑑帳、右下に京屋清右衛門と書かれている。表紙を除き一三丁あり、一丁オ・ウは文言である。一丁オ右上、裏表紙内側に「日本実業史博物館蔵」の印があり、二丁オ右下隅に「文久童」の印がある。

翻刻に当り許可を与えられた国立史料館、三井文庫に感謝したい。

なお凡例としては、平出、抬頭、欠字は一字あきに統一した。変態仮名は現行の字体に改め、古体、異体、略体の文字は現行の文字に改めたものが少なくない。原本の朱筆の部分は「」で囲み(朱)と註した。

対校本との異同の注記は、当該文字の左傍に・を附し、右傍に文字のみ異同を注記し特に三井本、実業史本に加え

なかった。註記に「三ナシ」は三井本が、「実ナシ」は実業史本が当該文字を欠くことを意味する。欠字分が長い場合は「」で囲み(以下「」内は三ナシ)と該当字句の冒頭に註した。全文に亘り原本にない句読点を補った。

(一)

(表紙)

天明八戊申年改

京飛脚仲間定帳

天明八戊申年四月十五日

京飛脚仲間出入一件御請書

差上申一札

仲間永代申合定法之事

京飛脚屋之内願方八軒

一京飛脚仲間之儀は、従古来明和五年迄、船老艘ニ極、申

惣代

虎 屋長兵衛

合之儀種々有之候得共、兎角一統不致符合猥相成、依

十八屋庄次郎

之天明五年巳十一月仲間破談、九人と十人二行ニ相分

同断相手方

・別船^{別船いたし}・致別船・式艘ニ而今ニ致通行候、然ル処双方組合之内

萬 屋武兵衛

德意論有之、御公辺ニ相成及出入、右破談、別船之儀

和泉屋徳兵衛

京都仲間差支有之趣を申立、願人方同心ニ而、当地西

右元代判五兵衛

御番所様江願被差出候ニ付、段々御札被為 成候

一私共及出入候德意先世利取并荷物積船等之儀御吟味之

上、口書被仰付候処、双方品々申立候趣意、手続而已
ニ而、願方（三ナシ）ハ永代帳并ニ仲間申合之証文を以、仲間定
法之由申立、相手方之もの共ハ明和五年子年之帳面ニ
古来（三ナシ）之申合色々有之候へ共、猥ニ相成候ニ付、向後
改候趣認メ御座候儀を申立、其以前之申合は不用候由
申争候ニ付、右帳面諸証文等御改被成候処、元極之帳
面証文ニ其時々仲間之人数連印ハ御座候へ共、死失或
株譲（実ナシ）り退キ、当時居残り候もの老人も無御座候ニ付、
右帳面証文等御取用難被成、銘々商売筋一牀之事ニ付、
都而取斗（ヒ）ヒ方区々ニ不相成様、兼々申合定帳面拵置、株
入之者御座候ハ、其度々得と申聞、定帳面ニ印形取
置候様可仕処無其儀、等閑情弱ニ仕置候より事発、申
合之心得方区々ニ相成、同シ仲間之人数ニ行ニ引分れ、
銘々勝手ニ商売仕居候而已ならず、仲間法之由双方（実ナシ）ハ
不束之筋申立ニ仕及出入候段、我意を申募候仕方、心
得違之事ニ思召、惣而仲間法之儀は申合次第之儀ニ
而、不埒之儀さへ無御座候ハ、御奉行所（ヒ）といつれ共

京飛脚仲間について（藤村）

可被及御沙汰ニ筋無御座候、殊庄次郎、与市、徳意
先、武兵衛、五兵衛世利取候との証拠（モ）茂無御座、殊ニ
兩人及難儀ニ候ハ、右徳意先可差戻旨、武兵衛、五
兵衛申之候上は、申分御座有間敷処、徳意預リ証文并
賃銀割符等之儀、元之申合之由不束之儀申争候段、被
謂間舖筋ニ付、不被及御沙汰ニ、荷物積（舟）船之儀は、一
牀手引船一艘ニ定有之趣、双方ハ申合符合仕候処、仲
間之者とも不熟より事発、当時貳艘ニ而積出候段、全
新規之儀ニ而、双方不埒之仕方、既京都飛脚屋とも商
売（モ）も差支候由願茂御座候上は、前々ハ申合之通取斗（ヒ）
諸向差支無之様可仕旨、元来私とも仲間株御免被為
成候節、新規ニ企候歟、其外不埒之筋御座候ハ、株
可被召放旨被仰渡、御請書をも被仰付置候所、前書之
始末不埒ニ被思召候ニ付、株可被召放候へ共、心得違
も可有御座哉と思召候ニ付、此度は御用捨可被為成
間、此上仲間一同熟談仕、諸向差支致無之様ニ、新規
之儀企申間敷旨、尤銘々徳意先ハ家督之儀ニ付、非分

之仕方^ハを以世利取候儀は仕間數儀、相互ニ慎可申事ニ候へ共、左候迎仲間之勝手ニ引付、德意先之もの不相好候ものにて茂、一旦用引受候ものハ難引替候様仕成候而は、手狭ニ而諸向差支候^(美ナシ)ニ事ニ候条、右躰之儀無之様、銘々相慎可申旨、若此上ニも仲間申合不行届、自分勝手之儀取斗ヒ及出入候歟、不埒之筋有之候ハ、株御取放、其品ニ寄、急度御答可 被成旨被 仰渡候

願方組合

今橋壱丁目袴屋治兵衛

借屋

天 満 屋 六 兵 衛

北久太郎町壱丁目佐井寺屋

半右衛門借屋

大 丸 屋 甚 之 助

幼少ニ付代判孫兵衛

京橋六丁目奈良屋弥兵衛

借家

天 満 屋 与 市

幼少ニ付代判萬助

堂嶋中貳丁目長崎屋清八

支配借屋

山 家 屋 大 吉

幼少ニ付代判伊兵衛

平野町壱丁目河内屋又右衛門

支配借屋

河 内 屋 与 市

幼少ニ付代判治郎三郎^次

北勘四郎町河内屋庄兵衛

借家

永 楽 屋 善 次 郎

幼少ニ付代判又兵衛

相手方組合

玉沢町明石屋庄右衛門借屋

長 浜 屋 吉 兵 衛

本町老丁目紀伊国屋市右衛門
借屋

和泉屋 治兵衛

道修町四丁目天王寺屋徳兵衛
借屋

大坂屋 七郎右衛門

幼少ニ付代判新兵衛
病氣ニ付代治兵衛

南本町五丁目河内屋勘吉

借屋

小和田屋 喜三郎

堂嶋新地中式丁目河内屋藤助
借屋

和泉屋 弥兵衛

病氣ニ付代和助

天満地下町長田屋作次郎

借屋

西田屋 徳次郎

病氣ニ付代平助

道修町五丁目

和泉屋 弥右衛門

私共仲間出入之儀、前書之通被為 仰渡候間、一同心得違無之様可仕旨被 仰渡候

玉沢町

明石屋 吉兵衛

幼少ニ付代判新助

天満東寺町前河内屋利兵衛
借屋加賀屋喜兵衛同家

紀伊国屋 弁吉

幼少ニ付代判佐兵衛

私共儀は、願方之者共^(三ナシ)借り船へ荷物積入罷在候^{得共}、
當時右船式艘ニ相成候段、仲間一同之不調法ニ而、奉恐

入、向後先規之通沓艘ニ被為 仰付候様仕度、世利取之御吟味は不奉願旨申上候へ共、一駄之出入仲間之支ニ御座候処、不被及御貪着ニ上は、私共申立候茂不被及御沙汰ニ仲間一統之支ニ候条、此度被 仰渡之趣承知仕、以來相慎、不埒之筋無之様可仕冒被 仰渡候

京都順番飛脚仲間
年行司

明 石 屋 六 兵 衛

同

近 江 屋 権 右 衛 門

同惣代

大 坂 屋 甚 兵 衛

私共儀御当地飛脚屋共方荷物積船相増候而は、着舟之運束有之、商売差支候由申立候得とも右船数之儀、從御奉行所被 仰渡候儀無御座、仲間之もの共申合之事ニ御座候所右申合取不締ニ付、御当地飛脚屋共及出

入候趣、双方之申立不被及御沙汰ニ旨、被 仰渡候間、其段承知可仕旨、且私共株之儀は、其筋御支配ニ而、御糺之上御差免有之、御当地飛脚屋共とハ、別段之儀ニ而、土地違之儀ニ付、此度願上候趣は、いつれとも不被及 御沙汰ニ旨、被 仰渡候

右之通被 仰渡候条、一件之者共可奉承知旨、被 仰渡奉畏候、依而御請如件

天明八戊申年

四月十五日

道修町五丁目

虎 屋 長 兵 衛

天満東寺町前

森 川 屋 乙 藏

幼少ニ付代判長兵衛借屋
播磨屋太助ニ同家

十八屋庄次郎

今橋壱丁目袴屋治兵衛
借屋

天満屋六兵衛

北久太郎町佐井寺屋半右衛門
借屋

大丸屋甚之助

幼少ニ付代判孫兵衛

京橋六丁目奈良屋弥兵衛
借屋

天満屋与市

幼少ニ付代判萬助

堂嶋中式丁目長崎屋清八
支配借屋

山家屋大吉

幼少ニ付代判伊兵衛

平野町壱丁目河内屋又右衛門

支配借屋

河内屋与市

幼少ニ付代判次郎三郎

北勘四郎町河内屋庄兵衛
借屋

永楽屋善次郎

幼少ニ付代判又兵衛

内平野町

萬屋武兵衛

本町壱丁目木津屋吉兵衛
支配借屋

和泉屋徳兵衛

右元代判五兵衛
病氣ニ付代善兵衛

玉沢町明石屋庄右衛門借屋

長浜屋吉兵衛

本町壱丁目紀伊国屋市右衛門

借屋

和泉屋 治兵衛

道修町四丁目天王寺屋徳兵衛

借屋

大坂屋 七郎右衛門

幼少ニ付代判新兵衛

病氣ニ付代治 兵衛

南本町五丁目河内屋勘吉

借家

小和田屋 喜三郎

堂嶋^(美ナシ)新地中式丁目河内屋藤助

借屋

和泉屋 弥兵衛

病氣ニ付代和 助

天満地下町長田屋作次郎

借屋

西田屋 徳次郎

病氣ニ付代平 助

道修町五丁目

和泉屋 弥右衛門

天満東寺町前河内屋利兵衛

借屋加賀屋喜兵衛同家

紀伊 国屋 弁吉

幼少ニ付代判佐兵衛

玉沢町

明石屋 吉兵衛

幼少ニ付代判新 助

京都順番飛脚仲間

年行司

明石屋 六兵衛

同

近江屋 権右衛門

同惣代

大坂屋 甚兵衛

右被 仰渡候趣、承知仕候以上

道修町五丁目年寄

病氣ニ付月行司

松 屋 久 次 郎

天満東寺町前月行司

中 嶋 屋 伊 兵 衛

今橋壱丁目年寄

真 嶋 隆 徳

北久太郎町壱丁目月行司

葉 山 屋 利 兵 衛

京橋六丁目月行司

金 屋 伊 兵 衛

堂嶋新地中式丁目月行司

河 内 屋 藤 助

平野町壱丁目月行司

日 野 屋 忠 兵 衛

御奉行所

北勘四郎町月行司

淡 路 屋 五 兵 衛

内平野町月行司

雜 喉 屋 吉 右 衛 門

本町壱丁目月行司

木 屋 清 九 郎

玉沢町年寄

大 和 屋 治 兵 衛

道修町四丁目月行司

油 屋 半 次 郎

南本町五丁目年寄

金 屋 与 兵 衛

天満地下町月行司

堺 屋 幸 助

右之通被為 仰渡候上は從古來之申分は不用、依之從此度堅相改、則此帳面ニ証置候、然ル上は此帳面耆冊ニ限リ候事

物御年寄拾四人様へ
三郷
惣代中へ

同式匁宛

一京飛脚仲間之儀は、明和九年辰ノ七月奉願上、御株式

拾貳軒奉蒙 御免、御冥加金拾兩宛、毎年上納仕来リ

候処、又候其後伏見、淀、八幡、大津迄道中筋之株ニ

願増候所、是又御聞届奉蒙 御免、御冥加金貳兩相

増、都合拾貳兩宛、永々毎年上納可仕事

同

惣会所守中へ

同三匁老包ニして

但し三郷惣会所守中へ

と書付ル

一御公儀様江年頭、八朔、御礼毎年相勤可申事

兩御奉行様江

銀貳兩宛

同

物書中へ

同式兩老包ニして

御家老四人様へ

同式匁宛

地方御与力四人様へ

同三匁宛

但し三郷物書御衆中へ

と書付ル

同御同心四人様へ

同老匁宛

盜賊方御与力式人様へ

同三匁宛

同

惣代若イ者中へ

同三兩老包ニして

御目附方式人様へ

同式匁宛

但し三郷惣代若キ衆中

へと書付ル

三郷

右入用割方、從行司取集、則從行司上納可仕事、尤商
売休株ハ、右割合出スニ不及候

一仲間御株之儀は、奉蒙 御免候節、御公儀様御株御帳面
ニ我々共住所、家号、名前、御記被為 置候御事ニ而候
間、銘々、名前を他人へ借シ候株杯と名付、他家ニて
商売致間敷候事

一奉蒙 御免候御株之御威光、難有奉存へし、一応一判
ニ而德意方御大切之金銀請持候儀、全御威光故也、
扱又紛失間違有間敷事ニ候へ共、自然船中道中ニ而、

風雨之故障有之候歟、又は償物之品等有之、我々共不
及身躰ニ候時、所持之御株并仕似之家督を望之仁へ
譲リ、其料物を以相償可申支、依之御株質物ニ差入銀
子等致借用候儀、決而不相成候、勿論仲間奥印等も不
致候、銘々名前を質物ニ差入候儀茂不相成候、此儀は
前段之通、償物等有之候節之引当之為メ、自今以後仲
間定法ニ堅相極候間、心得違無之様、相守可申事

一銘々名前御株、忤并無拋儀ニ而親類江相譲リ候節ハ、一

京飛脚仲間について（藤村）

家証抛判ニ而、天明八年ニ相改リ候申合仲間定法之
趣、堅為相守可申と言証文被相認、仲間へ差出シ可申
支、其節行司兩人立合、此帳面之趣読聞せ、仲間中銘
々ニ扣候帳面へ、印形相改取リ、顔見世相済候上、
御公儀様御帳面ニ張紙いたし可遣候事

一御株仕にせ家業、他人へ譲リ替度と申出候ハ、時之
行司仲間へ触しらせ、譲リ請主之町所を相尋、致吟
味、龜末無之人ニ候ハ、一同得心之上、可致張紙候
事

一銘々請持居候德意、世利取候もの并駄賃錢引下ケ下直
を申立ニいたし、世利取候儀は、甚非分之仕方ニ候条、
右躰之仁有之候ハ、時之行司其德意へ懸ケ合、其詔を
相糺、仲間へ其趣を触しらせ、元請持之駄賃直段ニ、
せり取候ものゝ德意へ頼入、元請持之德意主へ立戻リ
候迄は、船中道中組合を相除可申事

一右組合を被相除候而、我意を含、仲間之德意を猶せり
取候ハ、其町所へ懸ケ合、看板、掛行燈、仲間へ引

取、商売差留可申候、其時一言之申分無之候事

一 德意方^ル金銀荷物を請持候品ニ、不埒之儀いたし候もの有之候而、德意方へ立入被差留、仲間へ我等德意と申立候共、其筋合ニより、不及貪着ニ、右艀之不埒有之候ハ、船中道中相除可申候、右同様申分無之候事

一 仲間一統之荷物、風雨ニ而延着、又は自然之不調法ニ而、代呂物を損し、或雨天ニ而濡候儀^事坏、皆不相好儀ニ而候へとも、右艀之儀ニ付、德意之機嫌を損し用向

仲間之内へ申来候共、決而請持申間敷候^事支、此儀互ニ^{為知}しらせ合、友ニ相詫可被申候、其上聞入無之候ハ、

仲間中行司立会相談し、相済候迄相詫可遣候事

一 従古来、荷物積場所は、道修町東浜より乗船いたし候、風雨難船之儀、萬一有之候ハ、仲間中寄会、一統より訳立可仕候事、若又船中道中ニ而、紛失間違有之候ハ、其訳相糺、不相好儀ニ決候ハ、是又一統より訳立可仕事

一 登下荷物貫目、銘々致正直ニ、送り状ニ而、会所帳面

ニ相記可申候事、尤時々兩人宛申合、勝手ニ上下共貫目相改可申候、自然拾貫目^上、扣目方贈り状相違有之候ハ、尅貫目一日一夜之別船ニ可致事

一 銘々召抱置候奉公人、晦出し候共、仲間之内へ堅召抱申間敷候事、若又召抱候ハ、別船可致事

一 五節季算用日定

二月廿五日

四月廿五日

六月晦日

八月晦日

十月廿五日

十二月廿日

右定日ニ、行司船主仲間中立会可致算用事^{可致}

一 当仲間船之儀は、従古来過書下小三拾石

五代 五ノ組 三右衛門
名代 六ノ組 八兵衛

右之式艘、従古来仲間惣中へ借り請、荷物積来、手引舟となそらへ、無滞候間、一統乗組^船可申事、尤荷物積入方、四百五拾貫目、此余有之候時は、拾貫目ニ付、四拾八文替ニ致、舟方へ遣シ可申支、船賃錢之儀は、左之ことく相定有之候

九匁より

錢相場

拾貳匁迄之時

同 拾貳匁五分

拾五匁迄之時

五人加子

五人加子

四貫百四拾八文

三貫八百文

右舟賃行司と取集、船方へ可相渡処、銘々勝手ニ付、

舟主と家別ニ取集させ申候間、無滞相払可申事并会所

入用割万^萬一相滞候仁有之候而、譬聊^てニ而茂、其懸りよ

り申出候へ、右舟賃出錢無滞相濟候迄、組合相除、破

談別船可致事、其時申出候仁、致方惡敷杯と申立、意

恨を含憤、組合を招、此上弥別船可致杯と相募、談合

いたし企候儀有之候へ、急度商売差留可申候、其時

一言之申分無之候事

一会所家賃銀之儀、半通りは顔割、半通りは荷物貫目ニ

割付候事、船合羽代同断

会所定リ入用

卷ヶ月分

貳貫五百文

荷物掛け番料

京飛脚仲間について(藤村)

五百もん

壹貫もん

会所へ二季之祝儀^(三ナシ)

壹貫もん

壹貫もん

五百もん

壹貫もん

道中二季之祝儀^(三ナシ)

壹貫もん

五百もん

貳貫^貳五百もん^文

船頭加子祇園二季祝儀

船頭加子祇園二季祝儀

壹貫もん

五百もん^文

五百もんツ、

出口支配料

才布支配料油代

茶料

会所へ

女房へ

持子中へ

伏見船役所

役人中へ

淀馬差へ

淀宰領宿

懸ヶ掛番料

二季仕廻立年分之祝儀

加子へ遣ス

舟頭兩人へ遣ス

一六七

老貫文ツ、

暮之祝儀

舟頭兩人へ遣ス

老貫文ツ、

祇をん立
舟式艘へ遣ス

六月六日

同 十四日

右之通毎年可遣事

仲間御株譲リ替祝儀

金百疋

仲間へ

銀老兩

会所守へ

同三匁

同女房へ

同式匁宛

同家内中へ

同武匁宛

持子ともへ

同三匁宛

御行司兩人へ

翌日持參可致事

名前人幼少ニ付代判付右祝儀之外ニ

銀式兩

仲間江へ

又代判替り之節も右祝儀并ニ仲間へ之銀式兩右

同断可差出事

御株家業仕似他人へ譲り変之節祝儀

銀五枚

仲間江へ

金百疋

行司兩人へ相濟候翌日

持參可致事

銀老枚

会所守へ

同式兩

同女房へ

同老兩宛

同家内之者共へ

同式兩宛

同持子中へ

右之通可差出事

駄賃定

道中筋

野江

内大

関目

森小路

今市

土井

守口

大切

十番

佐田

志免野

当麻

木屋

松ヶ鼻

出口

牧方

天野川

三厨

渚

下嶋

上嶋

坂村

楠葉

橋本

八幡

右道中筋書状賃

拾六文

尤八幡山坊中ハ

貳拾四文

淀、伏見、下鳥羽、上鳥羽

拾六文

大津

拾八文

京都

拾貳文

右之通ニ相定候事

尤銘々請持德意ニハ、駄賃錢甲乙有、此儀ハ年分之用

向を致平均、勘弁を以請持申候事、右甲乙を見込、德

意を世利取候歟、又は内分ニ而駄賃を引下、用向を取

勝ニいたし候ハ、行司其德意ヘ懸ケ合、得と相調候

上、非分之仕方有之候ハ、前段之通、元請持之駄賃

直段ニせり取候ものハ、其德意ヘ頼込、違変無之様ニ

して、元請持之德意主ヘ立戻り候迄ハ、組合船中道中

相除可申支、右組合を被除候を幸ニ、我意を立、其外

仲間内德意を猶せり取候ハ、是又前段之通、世利取

候もの之町所ヘ相断、看板、掛行燈を仲間ヘ取上、商

売差留可申事、其時一言之申分無之候支、尤從古来互

ニ入込德意之儀ハ、相互ニ申合熟談いたし、少シ茂非

分之筋無之様、堅相慎可申事

一道中宿々賃錢払并道中書状、荷物之付錢、定出口割方

仕法書、会所ニ別帳面卷冊扣有之候

一宰領之儀ハ、毎夜船老艘ヘ四人宛、仲間惣中ノ之雇、

隔日都合拾貳人、仲間ヘ証文を取、若又仲間衆之存寄

ニ不相叶候宰領ハ、早速差替壓雇申間敷支

一当仲間銘々所持名前之御株、譲リ渡之儀、前段ニ示置

候外ニ、若又京都仲間内ヘ譲リ杯之儀、申出候仁有之

候ハ、当仲間中不殘打寄、相談之事、可宜候也、尅

人ニテ茂差支有之候ハ、決而相成不申候事

一右口々申合之外ニ、六ヶ敷儀致出来候ハ、仲間不殘

早速打寄、相談之上、正路之取斗可致支、若又可及

御公辺ニ儀ニ候ハ、尚以一統之取斗を相待被申ヘ

し、仲間ヘ相談^茂も無之、一人立 御公儀様江願出候儀

杯、堅相成不申候、此儀銘々常々可相嗜事ニ候也

右之條々、此度仲間惣中承知之上相改、自今以後定法

ニ相極候所実正明白也、然ル^{(実ナシ)ハ}上ハ、従古来之申合ハ不

用、此帳面之趣永々堅相用、相守可申候、萬一相背候

もの有之候ハ、右口々ケ条之通、可被申付候、其時

一言之申分無之候、為後日左ニ連印仍而如件

天明八戊申年

八月

内平野町

萬屋武兵衛[㊦]

(張紙1)(実ナシ)

内平野町

萬屋まぢ

代判市松[㊦]

文化六己巳年三月廿九日

(張紙2)

内平野町

萬屋武三郎

幼少ニ付代判市松[㊦]

文化九年申三月

(張紙3)(実ナシ)

内平野町

萬屋武兵衛[㊦]

文政七申年正月廿四日

(張紙4)(実ナシ)

船越町長浜屋武兵衛支配

貸家

萬屋駒藏

幼少ニ付代判市兵衛[㊦]

天保七申年八月九日

(張紙5)(実ナシ)

内平野町平野屋源兵衛貸家

萬屋駒藏

幼少ニ付代判市兵衛[㊤]

天保十亥年八月廿四日

(張紙6)(実ナシ)

内平野町三木屋平兵衛支

配貸家

萬屋駒藏

幼少ニ付代判佐兵衛[㊤]

天保十四年卯十二月

(張紙7)(実ナシ)

内平野町三木屋平兵衛支

配貸家

萬屋駒藏

幼少ニ付代判新助[㊤]

弘化貳巳年九月十九日

(張紙8)(実ナシ)

内平野町三木屋平兵衛支

配貸家

萬屋駒藏[㊤]

嘉永元年申十月四日

(張紙9)(実ナシ)

内平野町三木屋平兵衛支

配借家

萬屋駒藏

幼少ニ付代判平三郎[㊤]

文久三年亥五月十六日

(張紙10)(実ナシ)

内平野町三木屋平兵衛支

配借家

萬屋駒藏

代判佐兵衛[㊤]

慶応式丙寅十一月六日

(張紙11) (実ナシ)

内平野町三木屋平兵衛支

配借家

万屋駒藏

代判忠五郎㊤

慶応三丁卯年七月

本町壱丁目米沢屋吉兵衛支

配借屋

和泉屋徳兵衛㊤

(張紙1)

本町壱丁目〔小川屋利兵

衛〕支配借家

和泉屋〔得〕^(実ノミ)兵衛㊤

(張紙2)

本町壱丁目小川屋利兵衛

支配借家

和泉屋得右衛門㊤

文政九年戌十一月廿五日

(張紙3)

本町壱丁目丁子屋甚助

支配貸家

和泉屋得右衛門

幼少ニ付代判治郎兵衛㊤

天保六未年閏七月十九日

(張紙4)

本町壱丁目和泉屋治郎兵

衛貸家

和泉屋得右衛門

幼少ニ付代判弥兵衛㊤

天保九戌年九月十九日

(張紙5)

本町壱丁目和泉屋治郎兵

衛貸家

和泉屋得右衛門

幼少ニ付 代判佐兵衛[㊤]

天保十一子年十二月

(張紙6)

本町壱丁目和泉屋治郎兵衛借家

和泉屋徳右衛門[㊤]

安政四巳年四月十九日

玉沢町明石屋庄右衛門借屋

長浜屋 吉兵衛

(張紙1)

玉沢町

明石屋 吉兵衛[㊤]

(張紙2)

糺町安土屋利兵衛支配借^{かし}

家[㊤]

明石屋 寅 吉

代判喜右衛門[㊤]

文化十四年丑八月

(張紙3)(三ナシ)

文化十五年寅正月十四日

玉沢町明石屋吉兵衛かし

や

(張紙4)

玉沢町

明石屋 吉兵衛[㊤]

文化十五年寅二月廿九日

(張紙5)

明石屋吉兵衛義仲間定法相
背候ニ付奉願上此株仲間一
統へ相預り惣持ニ相成申候

文政六年未九月廿四日

(張紙6)

玉沢町荒物屋半兵衛借家

京屋 栄・治郎^次 ㊤

文政六年未十一月廿六日

(張紙7)

玉沢町荒物屋半兵衛借家

京屋 六之助

幼少ニ付 代判伊助 ㊤

文政六年未十二月十五日

(張紙8)

玉沢町荒物屋半兵衛借家

京屋 六之助

幼少ニ付 代判卯八 ㊤

文政八年酉四月十二日

(張紙9)

玉沢町荒物屋半兵衛借家

京屋 清右衛門 ㊤

(張紙10) (実ナシ)

文政十一年子八月十九日

江戸堀老丁目

京屋 清右衛門 ㊤

嘉永三戌年八月廿三日

本町老丁目紀伊国屋市右衛門借屋

和泉屋 治兵衛

幼少ニ付 代判徳兵衛 ㊤

(張紙1)

本町老丁目〔小川屋利兵衛支配〕借屋

和泉屋 治兵衛

幼少ニ付 代判〔得〕兵衛 ㊤

(三ナシ)

〔文政四年巳十一月四日〕

(張紙2) (三ナシ)

本町壱丁目小川屋利兵衛

支配借家

和泉屋治郎兵衛[㊤]

文政九戌年十一月廿五日

(張紙3)

本町壱丁目小川屋利兵衛

支配借家

和泉屋治郎兵衛

幼少ニ付代判

得右衛門[㊤]

文政十三寅年五月九日

(張紙4)

本町壱丁目小川屋甚平支

配借家

和泉屋治郎兵衛[㊤]

天保三年辰十月十九日

(張紙5)

本町壱丁目丁子屋甚助

支配貸家

和泉屋治郎兵衛[㊤]

天保六未年閏七月十九日

(張紙6)

本町壱丁目

和泉屋治郎兵衛[㊤]

天保九戌年九月十九日

道修町四丁目天王寺屋徳兵

衛借家

大坂屋七郎右衛門

幼少ニ付代判半兵衛[㊤]

(張紙1)

道修町四丁目天王寺屋徳

兵衛支配かしや

大坂屋七郎右衛門

兵衛支配借家

幼少ニ付代判半兵衛[㊦]

大坂屋七郎右衛門

文化九年申三月九日

幼少ニ付代判市兵衛[㊦]

(張紙2)

道修町四丁目天王寺屋得

(張紙5)

兵衛支配かしや

道修町四丁目天王寺屋得

大坂屋七郎右衛門

兵衛支配借家

幼少ニ付代判半兵衛[㊦]

大坂屋七郎右衛門

文政六年未三月廿四日

幼少ニ付代判半兵衛[㊦]

(張紙3)

道修町四丁目天王寺屋得

(張紙6)

兵衛支配借家

道修町四丁目天王寺屋得

大坂屋七郎右衛門

兵衛支配借家

幼少ニ付代判源太郎[㊦]

大坂屋七郎右衛門[㊦]

文政七申年二月廿四日

天保四巳年八月十九日

(張紙4)(実ナシ)

道修町四丁目天王寺屋得

(張紙7)

道修町四丁目天王寺屋得

兵衛支配貸家

大坂屋七郎右衛門

幼少ニ付代判嘉助㊤

天保十五辰年正月廿八日

(張紙8)(三ナシ)

道修町四丁目大坂屋嘉助

支配借家

大坂屋七郎右衛門㊤

安政貳年卯十二月九日

(張紙9)

道修町四丁目大坂屋嘉助

支配借家

大坂屋七郎右衛門

多病ニ付代判半兵衛㊤

安政五年六月廿六日

(張紙10)

道修町四丁目大坂屋嘉助

支配借家

大坂屋七郎右衛門

幼少ニ付代判半兵衛㊤

元治元年甲子十一月十六

日

(張紙11)

道修町四丁目大坂屋嘉助

支配借家

大坂屋七郎右衛門

慶応三丁卯年八月六日

南本町五丁目河内屋勘吉

借家

小和田屋喜三郎

幼少ニ付代判佐次兵衛㊤

(張紙1)

南本町五丁目〔錫屋武兵

衛支配 借屋

(張紙2) (実ナシ)

南本町五丁目錫屋武兵衛

支配かしや

小和田屋喜三郎[㊤]

文化六年巳九月廿九日

(張紙3)

南本町五丁目細屋重兵衛

かしや

小和田屋喜三郎

幼少ニ付代判長兵衛[㊤]

文化九年申四月

(張紙4) (実ナシ)

南本町五丁目細屋重兵衛

かしや

小和田屋喜三郎[㊤]

文化十一年戊五月十四日

(張紙5)

南本町五丁目細屋⁺重兵衛

かしや

小和田屋利右衛門[㊤]

文政元年寅十月

(張紙6) (実ナシ)

北久太郎町五丁目鯛屋季

左衛門かしや

小和田屋利右衛門[㊤]

文政三年辰十二月廿四日

(張紙7) (三ナシ)

北久太郎町五丁目八幡屋

吉兵衛支配借家

小和田屋利右衛門[㊤]

文政九戌年六月廿四日

(張紙8)

北久太郎町五丁目難波屋

吉兵衛支配借家

小和田屋利右衛門[㊤]

天保四年己七月四日

(張紙9)

北久太郎町五丁目丹波屋

彦兵衛貸家

小和田屋猶治郎

幼少ニ付代判利八[㊤]

天保七申年八月十四日

(張紙10)

北久太郎町五丁目丹波屋

彦兵衛貸家

小和田屋猶治郎

幼少ニ付代判利八[㊤]

天保十四卯年十一月

(張紙11)

北久太郎五丁目河内屋喜

兵衛貸家

小和田屋猶治郎[㊤]

嘉永元年申十一月

(張紙12)

北久太郎町五丁目河内屋

喜兵衛借家

小和田屋孝治郎[㊤]

嘉永七年寅八月十九日

(張紙13)

北久宝寺町五丁目大坂屋

清兵衛借家

小和田屋孝治郎^次

病氣ニ附代判伊作[㊤]

安政四巳年五月廿四日

(張紙14)(三ナシ)

北久宝寺町五丁目大坂屋

清兵衛借家

小和田屋市太郎

難波屋惣右衛門

幼少ニ附 代判伊作[㊤]

幼少ニ付 代判七兵衛[㊤]

安政四巳年七月廿四日

慶応三丁卯年七月廿六日

(張紙15)

本町五丁目播磨屋平兵衛

堂嶋新地中貳丁目河内屋藤

支配借家

助借屋

小和田屋市太郎

和泉屋 弥兵衛

幼少ニ附 代判庄兵衛[㊤]

幼少ニ付 代判弥右衛門[㊤]

安政四巳年十月六日

(張紙1)

(張紙16)

南勘四郎町布屋四郎兵衛

堂嶋新地三丁目柏屋儀兵

支配借家

(張紙2)

難波屋惣右衛門[㊤]

堂嶋新地三丁目柏屋儀兵

元治元年子七月廿六日

衛支配かしや

(張紙17)

南勘四郎町和泉屋作兵衛

文化六年巳九月廿九日

支配借家

(張紙3) (実ナシ)

和泉屋 弥兵衛[㊤]

堂嶋新地三丁目柏屋儀兵

衛支配かしや

泉屋 儀助[㊤]

文政七年申十一月九日

(張紙4)(実ナシ)

堂嶋新地三丁目柏屋義兵

衛借家

福田屋 藤治郎[㊤]

天保三年辰十月十四日

(張紙5)(実ナシ)

堂嶋新地三丁目柏屋義兵

衛貸家

福田屋 藤治郎[㊤]

天保十一子年七月廿四日

(張紙6)(実ナシ)

堂嶋新地三丁目堺屋記治

郎借家

福田屋 藤治郎

幼少ニ付 代判利兵衛[㊤]

安政四年巳十一月六日

(張紙7)(実ナシ)

堂嶋新地三丁目堺屋記治

郎借家

福田屋 永之助

幼少ニ付 代判利助[㊤]

安政四年巳十一月廿六日

(張紙8)(実ナシ)

堂嶋新地三丁目堺屋記次

郎借家

福田屋 嘉次郎

幼少ニ付

代判清右衛門[㊤]

萬延元年申六月十六日

(張紙9)(実ナシ)

堂嶋新地三丁目堺屋記次

西田屋徳松[㊦]

郎借家

(張紙2)

福田屋 嘉次郎

天満地下町伊賀屋半兵衛

幼少ニ付 代判衆七[㊦]

かしや

文久元年酉八月六日

西田屋徳八[㊦]

(張紙10) (実ナシ)

文化七年午三月

堂嶋新地三丁目堺屋記次

(張紙3)

郎借家

天満地下町伊賀屋ため代

福田屋 嘉次郎

判吉右衛門かしや

幼少ニ付 代判衆七[㊦]

西田屋徳蔵

元治元年甲子十一月十六日

代判久兵衛[㊦]

日

文化十年酉七月廿八日

天満地下町長田屋作次郎借

(張紙4)

家

天満地下町姫路屋吉兵衛

西田屋 徳次郎

支配かしや

(張紙1)

西田屋徳蔵[㊦]

天満地下町

文化十三年子十月

(張紙5)

天満地下町亀屋もと代判

吉兵衛かしや

(実ナシ)

文政元年寅十月

(張紙6)

天満地下町亀屋もと代判

吉兵衛借家

西田屋徳蔵

幼少ニ付代判久兵衛㊦

文政元年寅十二月十四日

(張紙7)(三ナシ)

天満地下町

西田屋得蔵

幼少ニ付代判久兵衛㊦

文政三年辰八月

(張紙8)

天満地下町

西田屋得蔵

幼少ニ付

代判七郎兵衛㊦

文政四年己七月廿四日

(張紙9)

天満地下町

西田屋得蔵㊦

天保貳卯年正月十九日

(張紙10)

天満地下町

西田屋得蔵㊦

天保十一子年七月廿四日

(張紙11)

天満地下町

西田屋ひさ

代判久吉㊦

天保十一子年十二月九日

(実ナシ)

(張紙12)

天満地下町西田屋ひさ代

判久吉貸家

西田屋 徳兵衛[㊦]

天保十貳年丑十一月九日

(張紙13) (実ナシ)

西田屋 徳治郎

安政五年年十月廿六日

(張紙14)

天満天神筋町炭屋幸七

借家

西田屋 本^治次郎

幼少ニ^付附代判真三郎[㊦]

安政五年年十一月廿六日^(実ナシ)

(張紙15)

天満天神筋町炭屋幸七

借家

西田屋 本治郎[㊦]

慶応三丁卯年七月廿六日

道修町五丁目

和 泉 屋弥右衛門[㊦]

(張紙1)

道修町五丁目

和 泉 屋弥右衛門[㊦]

文政五年年三月十九日

(張紙2) (実ナシ)

道修町五丁目和泉屋弥右

衛門かしや

泉 屋義三郎[㊦]

文政七年申十一月九日

(張紙3) (実5)

道修町五丁目大和屋三郎

兵衛かしや

文政十貳年丑十二月十四

日

(張紙4)(実3)

道修町五丁目大和屋三郎

兵衛借家

泉屋 義三郎

幼少ニ付 代判定七[㊦]

文政十三寅年五月九日

(張紙5)(実4)

道修町五丁目大和屋三郎

兵衛借家

泉屋 義三郎

幼少ニ付 代判藤九郎[㊦]

文政十三寅年九月十四日

(張紙6)

道修町五丁目大和屋三郎

兵衛借家

京飛脚仲間について(藤村)

福田屋 吉兵衛[㊦]

天保三年辰十月十四日

(張紙7)

中船場町漆屋庄右衛門

かしや

福田屋 吉兵衛[㊦]

天保五年午三月十九日

(張紙8)

中船場町漆屋庄右衛門

貸家

福田屋 估兵衛[㊦]

天保十一子年七月廿四日

(張紙9)(三ナシ)

中船場町

福田屋 吉兵衛[㊦]

嘉永六年丑十月十四日

(張紙10)(三ナシ)

嘉永七年寅二月十四日

(張紙11) (三ナシ)

道修町五丁目河内屋幸助

支配借家

福田屋 孫三郎

幼少ニ付 代判利助

安政四年巳七月四日

(張紙12)

中船町

福田屋 系い

代判徳蔵

安政四年巳十一月六日

(張紙13)

道修町五丁目河内屋幸助

支配借家

福田屋 孫三郎

安政四年巳十一月廿六日

(張紙14)

中船場町大文字屋弥兵衛

借家

福田屋 孫三郎

安政六未年四月六日

(張紙15)

中船場町大文字屋弥兵衛

借家

福田屋 喜兵衛

萬延元年申六月十六日

(張紙16)

中船場町京屋清右衛門

借家

福田屋 喜兵衛

萬延元年申六月廿日

今橋巷丁目

天満屋 六兵衛[㊤]

(張紙1)

今橋壱丁目

天満屋 六兵衛[㊤]

文政四年巳十二月九日

(張紙2)(三ナシ)

今橋壱丁目

天満屋 てる

代判七郎兵衛[㊤]

文政七申年十二月九日

(張紙3)

今橋壱丁目

天満屋 光

代判七郎兵衛[㊤]

文政九戌年六月廿四日

(張紙4)

今橋壱丁目

天満屋 六兵衛[㊤]

文政九戌年十一月廿五日

(張紙5)(実ナシ)

今橋壱丁目

天満屋 六兵衛[㊤]

嘉永六年丑二月四日

(張紙6)

天満屋 六兵衛

代判

山家屋 卯兵衛[㊤]

明治二巳年十一月

北久太郎町壱丁目大和屋喜

兵衛支配借家

大丸屋 甚之助[㊤]

(張紙1)

北久太郎町壱丁目〔玉屋

清兵衛家守

(張紙2)

北久太郎町壱丁目紀伊国

屋兵助支配かしや

大丸屋 甚之助

幼少ニ付代判平兵衛[㊤]

文化十一年戊八月

(張紙3)

北久太郎町壱丁目〔平野

屋嘉右衛門〕支配かしや

(張紙4)

北久太郎町壱丁目

大丸屋 甚之助[㊤]

文政貳年卯五月十九日

今橋壱丁目天満屋六兵衛方

ニ同家

一八八

塩屋 忠兵衛[㊤]

(張紙1)

此塩屋忠兵衛義、病身ニテ
渡世難相勤候ニ付、所持之
株、仲間之内天満屋六兵衛
へ相譲り、以来六兵衛所持
ニ相成申候

文政四年巳十一月四日

(張紙2)

此塩屋忠兵衛義、病身ニテ
渡世難相勤候ニ付、所持之
株私へ譲り受候間、此株ニ
付、以来諸入用是迄之通
り、私方差出シ可申候[㊤]
上

今橋壱丁目

天満屋 六兵衛[㊤]

文政四年巳十一月四日

(張紙3) (三ナシ)

今橋壱丁目

天満屋てゐる

代判七郎兵衛[㊤]

文政七申年十二月九日

(張紙4)

今橋壱丁目

天満屋 光

代判七郎兵衛[㊤]

文政九戌年六月廿四日

(張紙5)

今橋壱丁目

天満屋 六兵衛[㊤]

文政九戌年十一月廿五日

堂嶋新地裏壱丁目灘屋孫兵

衛借屋

舛屋 作 二[㊤]

(張紙1)

京飛脚仲間について(藤村)

堂嶋新地裏壱丁目灘屋孫

兵衛借家

舛屋 友 七[㊤]

文化十三年子十一月廿四

日

(張紙2)

堂嶋新地裏壱丁目灘屋孫

兵衛かしや

舛屋 友 七[㊤]

天保四巳年五月廿四日

(張紙3)

堂嶋新地裏壱丁目灘屋孫

兵衛かしや

舛屋 友 七

代判源右衛門[㊤]

天保五年三月十四日

(張紙4)

堂嶋新地裏𠵼丁目灘屋孫

兵衛貸家^{かしや}

兵衛かしや

榊屋・徳兵衛[Ⓔ]

榊屋利兵衛[Ⓔ]

天保十四卯年十一月

天保七申年八月九日

(張紙5)

堂嶋新地裏𠵼丁目灘屋孫

兵衛貸家

表紙共紙數五拾貳枚[Ⓔ]

榊屋利兵衛

代判伊兵衛[Ⓔ]

天保八酉年正月廿四日

(張紙6)

堂嶋新地裏𠵼丁目灘屋孫

兵衛貸家

榊屋利右衛門[Ⓔ]

天保八酉年四月十九日

(張紙7)

堂嶋新地裏𠵼丁目灘屋孫

(二)

(表紙)

嘉永三庚戌年四月改之

京飛脚屋定目

一 此京飛脚屋條目写帳面他家江相渡、家督為引当銀子取引
堅致間敷候事、依之一統奥江^{調印致}致調印候如件

表紙除紙員数三拾枚

定

一 京飛脚渡世之儀者、寛永度^カ相始、其後金銀諸荷物書
狀等賃銀高価ニ不相成様、且者道中船中混雜無之様、
毎夕一纏ニ致し、組合渡世と相定元録^タ十三年辰二月^カ
毎夕無滞差立、船陸往来致し候段、御治世之御国恩、
冥加至極難有奉存候、右ニ付左之箇條通、無忘却急度

京飛脚仲間について(藤村)

相守候事

一 從 御公儀様被為 仰出候御法度御触面之趣、急度相
守可申事^立

一 御公用堂上様方御用、諸侯様方御用を奉始、百性町人
用向ニ至迄、大切之金銀諸荷物書狀ニ至迄、得意方^カ
一応一判ニ而被相渡請持候支、全御威光故也、依之聊
心得違無之様、正路に渡世可被致候事、若風雨天災ニ
付、無拠途中ニ而障取候儀者、格別ニ候得共、都而辨
理能定法之通、諸届致し、不行届無之様、急度可相心
得候、此条手先働人者勿論、店方召遣之者ニ至迄、兼
而急度可申付事

一 船賃其外諸入用之儀者、毎間一統立会之上算当割賦致
し、右出錢節季毎ニ無滞差出^{（奥ナシ）}し可申候、万^萬一疋間ニ而
茂相滞候^{ハ、}船中道中相除可申候事

一 船中道中万^萬一故障有之候歟、亦者盜難等ニ而辨金價物
有之候節^者は、相互ニ為助合、兼而為手当積置候日々積
錢之儀者、右等之節、家名退転不致様仕法ニ付、其節

之振合を以融通可致候、借主^者定^メ通六朱利足相加へ、銀高ニ応し相對を以、日々返済可致候事、元來我身上不相応之諸品、請持候渡世之儀ニ付、右積錢ニ而償^{難及償}心難^者及候節は、無拠所持之仕似せ家督諸得意ニ至迄、望之仁へ讓渡、其料物を以可相償、依之仕似せ家督質物書入等ニ而、銀子借用致候儀、決而不相成候都合を以、同業内^者奥印等致間敷候、此段堅可相守候、万一心得違有之候者、兩家共道中船中相除可申事^事、一銘々請持居候得意先々、馴染知音之方用向者不及申ニ、尚亦外家ニ旧來請持居候得意、内分ニ而羅取候者、非分之仕業ニ候間、一統相談之上、船^舟中、道中相除可申事^事、一得意方^者請持候金銀荷物ニ、不埒之儀有之候者、其段一統中^者奉御斷、船中道中可相除事^事、一一統之荷物、風雨ニ而延着、亦者自然^は之不調法ニ而、代呂物を損し、或者雨天ニ而濡候儀坏、不相好儀ニ候得共、右牀之儀ニ付、外店へ用向申參候共、聞濟被具

候迄、俱々同伴致し罷出詫可申候、達而聞入無之候ハ、一統へ用向可預^ル候事、右様之折柄を見込、用向羅取候者、非道之致方ニ付、船中道中相除可申事一陸往來働人賃錢割賦、日々無滯差出し可申候、万一相滯候^者ハ、道中相除可申候^事、一船陸共出刻申合通承^{致承知}知致し候、万一延刻ニ相成被捨候共、一言之申分無之^事、一毎夕浜先へ出勤當番之節、一切等閑ニ致間敷候^事、一得意方^者大切之金銀、荷物請持候渡世之儀ニ付、名前人平生身持不^レ宜候得者、請負居候親類^者退身為致可申^事、不相用候者、船^舟中道中可相除候、幼少ニ付代判人成共、身持不^レ宜候^者ハ、是亦同様之事、猶亦代判人渡世不勝手ニ而、一統示談用向勝手相心得候代人を以為相勤候得者、代勤一札差入候事^事、一先規^{（実ナシ）}ニ無之、新規之儀一己ニ相企、我意之取斗、堅致間敷候、何等之儀も一統示談之上、取斗可致候、諸屈物定法之外、刻限混雜之屈方致し、一統差支ニ及ひ候

者、船中道中可相除事

一統中江申出候私用之儀者、印形致し書附を以可申出
夏

一示談集会之砌、案内有之候ハ、不参致間敷候、万一

無抛儀ニ而致不参候ハ、其段相断可申事、数度不参ニ

及ひ候歟、亦者集会一決之儀、跡ニ而一己之存寄申立、

我意之取斗致し候ハ、道中船中可相除事

一毎夕為登荷物宰領と含合致し、不正路之儀有之候ハ、

船中道中可相除夏

一勝手ニ寄転宅致度夏も候ハ、一統中江方角申出、差

支有無尋合候上、変宅可致候、若差支之儀有之候得ハ

相止り可申候

一一統之内、近火有之候節、早速駈附、請負有之候諸品

帳面等類焼紛失無之様、心を用ひ取除置、相鎮り候上

ニ而、元々江無滞相渡可申候、猶亦類焼致し候ハ、

当家混雜之事故、居所仮宅相定り候迄、下り諸届物、

方角を以而割符致し相届、得意方之差支ニ不相成様、

取斗可申事

一同業内ニ被召使候下人、堅く召遣ひ間敷候、此儀不
存、不斗召遣候而、跡此儀承知致候者、早速晦遣し
可申候夏

可申候夏

右之條々堅相守可申候、仕似せ家督讀替、変宅、名前

替、印形改等致し候節、別紙一札差入候上、此帳面へ張

紙可致夏、右箇條之内、万一一巻ケ条ニ而も心得違有之

候者、一統中如何様に被「取斗候共其節一言之申分

無之候、依而連判如件

北久太郎町屯丁目

大丸屋 甚之助

今橋屯丁目

天満屋 六兵衛

(張紙1)

天満屋 六兵衛

嘉永六年丑二月

(張紙2)

天満屋 六兵衛

福田屋 吉兵衛[㊤]

代判山家屋卯兵衛[㊤]

嘉永六年丑十月十四日

明治二己年十一月

(張紙2)

嘉永七年寅二月十四日

本町屯丁目

(張紙3)

和泉屋治郎兵衛[㊤]

中船場町

同町和泉屋治郎兵衛貸家

福田屋 あい

和泉屋徳右衛門

代判徳蔵[㊤]

幼少ニ付代判佐兵衛[㊤]

安政四年十一月六日

(張紙1)(実ナシ)

(張紙4)

和泉屋徳右衛門[㊤]

道修町五丁目河内屋幸助

安政四己年四月十九日

支配借家

福田屋 孫三郎[㊤]

中船場町漆屋庄右衛門貸家

安政四年己十一月廿六日

福田屋 吉兵衛[㊤]

(張紙5)(実ナシ)

(張紙1)

中船場町

中船場町大文字屋弥兵衛
借家

福田屋 孫三郎 ㊤

安政六未年四月六日

(張紙6)

中船場町大文字屋弥兵衛

借家

福田屋 喜兵衛 ㊤

萬延元年申六月十六日

(張紙7)

中船場町京屋清右衛門

借家

福田屋 喜兵衛 ㊤

萬延元年申六月廿日

(張紙1)

萬屋 駒 藏

幼少ニ付 代判平三郎 ㊤

文久三年亥五月十六日

(張紙2)

萬屋 駒 藏

代判佐兵衛 ㊤

慶応貳丙寅十一月六日

(張紙3)

内平野町三木屋平兵衛

支配借家

萬屋 駒 藏

代判忠五郎 ㊤

慶応三丁卯年七月

内平野町三木屋平兵衛支配貸家

萬屋 駒 藏 ㊤

代勤

萬屋 武 助 ㊤

京飛脚仲間について(藤村)

北久太郎町五丁目河内屋喜兵衛
貸家

小和田屋猶治郎[㊤]

小和田屋市太郎

(張紙1)

北久太郎町五丁目河内屋

安政四巳年十月六日

幼少ニ附代判庄兵衛[㊤]

喜兵衛借家

(張紙5)

小和田屋孝治郎[㊤]

南勘四郎町布屋四郎兵衛

嘉永七年寅八月十九日

支配借家

(張紙2)

北久宝寺町五丁目大坂屋

元治元年子七月廿六日

難波屋惣右衛門[㊤]

清兵衛借家

(張紙6)

小和田屋孝次郎

南勘四郎町和泉屋作兵衛

病氣ニ附代判伊作[㊤]

支配借家

安政四巳年五月十九日

難波屋惣右衛門

(張紙3)

安政四巳年五月(廿四日)

幼少ニ付代判七兵衛[㊤]

(張紙4)

本町五丁目播磨屋平兵衛

江戸堀老丁目

京屋清右衛門[㊤]

支配借家

道修町四丁目天王寺屋徳兵衛支

配貸家

大阪屋七郎右衛門

幼少ニ付代判

嘉助[㊦]

(張紙1)

大阪屋七郎右衛門[㊦]

代勤 喜兵衛[㊦]

安政貳年卯十二月

(張紙2)

道修町四丁目大坂屋嘉助

支配借家

大坂屋七郎右衛門[㊦]

代勤 茂助[㊦]

安政四年巳八月

(張紙3)(実ナシ)

道修町四丁目大坂屋嘉助

支配借家

大坂屋七郎右衛門

多病ニ付代判半兵衛[㊦]

安政五年年六月廿六日

(張紙4)

道修町四丁目大坂屋嘉助

支配借家

大坂屋七郎右衛門

幼少ニ付代判半兵衛[㊦]

元治元年甲子十一月十六

日

(張紙5)

道修町四丁目大坂屋嘉助

支配借家

大坂屋七郎右衛門[㊦]

慶応三丁卯年八月六日

(張紙6)

道修町四丁目大坂屋嘉介

支配借家

淀屋七兵衛[㊤]

明治三年庚午正月廿八日

清右衛門[㊤]

萬延元年申六月十六日

堂嶋^嶋新地三丁目堺屋記治郎貸家

福田屋藤治郎[㊤]

堂嶋^(実ナシ)新地三丁目堺屋記治郎[㊤]

(張紙1)

福田屋 藤治郎

福田屋 嘉治郎

幼少ニ付代判利兵衛[㊤]

幼少ニ付代判衆七[㊤]

安政四年巳十一月六日

文久元年酉八月六日

(張紙2)(実ナシ)

福田屋 永之助

堂嶋^(実ナシ)新地三丁目堺屋記次郎[㊤]

幼少ニ付代判利助[㊤]

郎借家

安政四年巳十一月廿六日

福田屋 嘉次郎

(張紙3)

堂嶋新地三丁目堺屋記治郎

元治元年子十一月十六日

郎借家

幼少ニ付代判衆七[㊤]

天満地下町福井屋儀兵衛貸家

西田屋徳治郎[㊤]
代勤^(三ナシ)

西田屋徳兵衛[㊤]

(張紙1)(実ナシ)

西田屋 徳治郎[㊤]

安政五年十月廿六日

(張紙2)(実ナシ)

天満天神筋町炭屋幸七

借家

西田屋 本次郎

幼少ニ附代判真三郎[㊤]

安政五年十一月廿六日

(張紙3)

天満天神筋町炭屋幸七

借家

西田屋 本治郎[㊤]

慶応三丁卯年七月廿六日

堂島新地裏壱丁目灘屋孫兵衛貸家

升屋 徳兵衛[㊤]

一京飛脚屋中一統、川越ニ無之、式丁四方近火之節、早速手引船廻し、荷物積入、万端心を付可申候、尤御一統中、目印高張挑灯并ニ幟相預り置、其節可用候但し

銭貳貫文、手引船廻し賃

外ニ

白米 三升 仕入

右之外、酒手等為乞請問敷候事

^(実ナシ)
外ニ合印之法被 手引船屋

八枚預り置申候

(張紙)

萬屋 武助[㊤]

萬屋 武助[㊤]

安政四巳年三月

一飛脚荷物之儀者、往古より手引荷物と唱へ、卅石船式艘
借切、毎夕隔番ニ仕立、道修町東堀浜より戌之刻限ニ出船
可致事ニ候、不相好儀ニ候得共、万一於途中難船等有
之候ハ、聞付次第、一統早速会所へ馳集り、別船を
借受、其場所へ馳登り、濡荷物相改、差略可致候、尤
濡荷物ニ付、御得意方江相詫可申入義者相互ニ心を尽
し、助け合、御聞濟ニ相成候迄、情々参を以御断可申
出候事、右等之節、不参之仁有之候ハ、等閑之至ニ
候間、船中道中可相除事

(張紙1)(三ナシ)

今橋老丁目

天満屋 六兵衛[㊤]

嘉永六年丑二月四日

(張紙2)(三ナシ)

北久宝町五丁目清兵衛

借家

小和田屋孝治郎

病氣ニ付

代判伊作[㊤]

安政四巳年五月廿四日

(張紙3)(三ナシ)

福田屋藤治郎代判利兵衛相統致居候仕似せ家業、本家福田
屋太七より預り居候所、此度差戻シ相改メ

堂嶋新地三丁目堺屋記治郎

借家

福田屋 永之助

幼少ニ付代判利助[㊤]

安政四年巳十一月廿六日

(張紙4)(三ナシ)

中船場町福田屋より代判徳蔵相統致居候仕似せ家業、本家

福田屋太七の預り居候所、此度差戻し相改メ

道修町五丁目河内屋幸助支配

借家

福田屋 孫三郎^印

安政四年巳十一月廿六日

(三)

(表紙)

嘉永四辛亥年三月

京飛脚仲間名前帳

京飛脚之儀、先前より仲間組合之定を以取締相立、年々冥加金拾貳兩宛上納、名前帳 御役所江差上置御座候処、去ル寅年都而株札并問屋組合等御停止、冥加金銀不及上納、其外品々被 仰渡、株仲間組合御差止相成候処、今般諸問屋組合とも再興之儀、左之通被 仰渡候一去ル寅年株札并問屋仲間組合等停止、是迄納来候冥加金銀上納者勿論、無代納物、無賃人足駄付其外冥加勤之類も、悉免除被 仰付候処、其以来商法相崩、諸品下直ニも不相成、却而不融通之趣相聞候付、此度問屋組合之儀、都而前々之通再興申渡、弥以冥加金銀上納之

義者、不被及御沙汰候間、其旨を存、諸物価際立直段引下ケ、メ売メ買者不及申、品劣掛目減等無之、一切正路ニ可致売買候、且前々諸職人、諸商人仲間、組合取極候度毎、新規仲間加入之もの有之候共、差障申間敷候、勿論其者共々多分之礼金、振舞等為致候儀者、不相成旨、其外取締方之儀、追々申渡有之儀ニ而、新規商売相始候儀を差構無之筈ニ候間、此度問屋組合再與申付候迎、前々之如く株札等相渡候儀ニ者無之、人数之増減者勝手次第之事ニ付、不筋之申合、手狭窮屈之自法相立候儀者、決而不致、併其渡世柄ニ寄無構、人数不相定候而者差支候儀有之品者、吟味之上明白ニ其謂無之候而者、容易ニ難聞届儀ニ付、其段相心得、是迄之商法ニ不流、質素儉約を第一ニ致し、諸事奢侈潜上之儀無之様相慎、深く太平之御仁徳を奉仰、分々之渡世永統致し、銘々安住之冥加を弁、四民暮し方弁利之儀を厚心掛、実直ニ産業を営候様可致、此上心得違一己之利得ニ迷ひ、申渡を不相用もの有之候ハ

、早速召捕逐吟味、嚴重之御仕置申付仕儀ニ寄、家業取放候間、聊不取締之儀無之様精々厚可申合候右之通被仰渡、一統難有承知奉畏、諸物価引下ケ之御趣意貫通仕候様、取斗可申、尤此後仲間之内、変名、変宅、印形改其外病死、名前代人代り者勿論、新規仲間加入之者等御座候度毎、不洩様御断申上、此帳面帳紙可仕候、依之一統連印名前帳差上申処如件

嘉永四辛亥年三月

右前書之通、今般御冥加金銀上納御免除之儘、仲間組合渡世再興被為仰出候ニ付、当京飛脚之儀も右之旨被為仰付御仁恵之段難有奉畏候、則御役所并惣御会所江名前帳奉差上候、右帳面前書者從御役所御差図御文言深恐伏奉承知候而、名前奉書上候ニ付、猶更御治世之御仁徳奉仰、軒々之渡世永統仕、銘々安住之冥加を深く奉存、殊ニ一応一判ニ而請負候渡世ニ付、心得違之儀無之様、正路ニ可致候、尚又一己之

存立を以、我意之振舞致間敷候儀者勿論、取締ニ聊差障候儀致間敷候、萬一心得違有之候ハ、如何様ニ被取斗候共、其節一言之申分無之候、為後証依而連印如件

嘉永四年六月
(三ナシ)

貳拾貳軒仲間

一老軒

北久太郎老丁目

大丸屋甚之助^印

今橋老丁目

一老軒

天満屋六兵衛^印

(張紙1)

今橋老丁目

天満屋 六兵衛^印

嘉永六年丑二月

(張紙2)

京飛脚仲間について(藤村)

天満屋 六兵衛

代判

山家屋 卯兵衛^印

明治二巳年十一月

本町老丁目

和泉屋治郎兵衛^印

同町

和泉屋次郎兵衛^治借家

和泉屋得右衛門

幼少ニ付代判佐兵衛^印

(張紙1)(実ナシ)

本町老丁目和泉屋治郎兵

衛借家

和泉屋徳右衛門^印

安政四巳年四月十九日

中船場町

漆屋庄右衛門借家

一巻軒

福田屋 吉 兵衛[㊤]

(張紙1)(実ナシ)

中船場町

福田屋 吉兵衛[㊤]

嘉永六年丑七月十四日^カ

(張紙2)(実ナシ)

嘉永七年寅二月十四日

(張紙3)

中船場町^(三ナシ)福田屋吉兵衛死

跡

福田屋 ㍻い

代判徳藏[㊤]

安政四巳年十一月六日

(張紙4)

中船場町福田屋㍻い代判徳

蔵相統致居候仕似せ家業、
本家福田屋太七ノ預り居候
所、此度差戻し相改メ
道修町五丁目河内屋幸助
支配借家

福田屋 孫三郎[㊤]

安政四年巳十一月廿六日

(張紙5)(実ナシ)

中船場町大文字屋弥兵衛

借家

福田屋 孫三郎[㊤]

安政六未年四月六日

(張紙6)

中船場町大文字屋弥兵衛

借家

福田屋 喜兵衛[㊤]

萬延元年申六月十六日

(張紙7)

中船場町京屋清右衛門

借家

福田屋 喜兵衛[㊤]

萬延元年六月廿日

萬屋 駒 藏

代判佐兵衛[㊤]

慶応貳丙寅十一月六日

(張紙3)

内平野町

三木屋平兵衛支配借家

萬屋 駒 藏[㊤]

一老軒

(張紙1)

内平野町三木屋平兵衛支

配借家

萬屋 駒 藏[㊤]

幼少ニ付 代判平三郎[㊤]

文久三年亥五月十六日

(張紙2)

内平野町三木屋平兵衛

支配借家

一老軒

北久太郎町五丁目

河内屋喜兵衛借家

小和田屋 猶次郎[㊤]

(張紙1)

北久太郎町五丁目河内屋

喜兵衛借家

小和田屋孝治郎[㊤]

嘉永七年寅八月十九日

(張紙2)

北久宝寺町五丁目大坂屋

清兵衛借家

小和田屋孝次郎^治

病氣ニ附 代判伊作^印

安政四巳年五月廿四日

(張紙3)

本町五丁目播磨屋平兵衛

支配借家

小和田屋市太郎

幼少ニ附 代判庄兵衛^印

安政四巳年十月六日

(張紙4)

南勘四郎町布屋四郎兵衛

支配借家

難波屋惣右衛門^印

二〇六

元治元年子七月廿六日

(張紙5)

南勘四郎町和泉屋作兵衛

支配借家

難波屋惣右衛門

幼少ニ付 代判七兵衛^印

慶応三丁卯年七月廿六日

江戸堀老丁目

京屋清右衛門^印

道修町四丁目

天王寺屋徳兵衛支配借家

大坂屋七郎右衛門

幼少ニ付 代判嘉助^印

(張紙1)

道修町四丁目大坂屋嘉助

支配借家

大坂屋七郎右衛門^取④

安政貳年卯十二月九日

(張紙2)(実ナシ)

道修町四丁目大坂屋嘉助

支配借家

大坂屋七郎右衛門

多病ニ付代判半兵衛^取④

安政五午年六月廿六日

(張紙3)

道修町四丁目大坂屋嘉助

支配借家

大坂屋七郎右衛門

幼少ニ付代判半兵衛^取④

元治元年甲子十一月十六

日

(張紙4)

道修町四丁目大坂屋嘉助

支配借家

大坂屋七郎右衛門^取④

慶応三丁卯年八月六日

(張紙5)

道修町四丁目大坂屋嘉助^介

支配借家

淀屋七兵衛^取④

明治三年庚午正月廿八日

堂嶋新地三丁目

堺屋記治郎借家

福田屋藤治郎^取④

(張紙1)

堂嶋新地三丁目堺屋記治

郎借家

福田屋藤治郎

幼少ニ付代判利兵衛^取④

安政四巳年十一月六日

(張紙2)

福田屋藤治郎代判利兵衛相
統致居候仕似せ家業、本家
福田屋太七より預り居候所、
此度差戻し相改メ

堂嶋新地三丁目堺屋記治

郎借家

福田屋 永之助

幼少ニ付代判利助[㊤]

安政四年巳十一月廿六日

(張紙3)

堂嶋新地三丁目堺屋記次

郎借家

福田屋 嘉次郎

幼少ニ附

代判清右衛門[㊤]

萬延元年申六月十六日

一老軒

二〇八

(張紙4)

堂嶋新地三丁目堺屋記次

郎借家

福田屋 嘉次郎

幼少ニ附代判衆七[㊤]

文久元年酉八月六日

(張紙5)

堂嶋新地三丁目堺屋記次

郎借家

福田 嘉次郎

幼少ニ付代判衆七[㊤]

元治元年甲子十一月十六

日

天満地下町

福井屋儀兵衛借家

西田屋徳

次郎[㊤]

(張紙1)(実ナシ)

天満地下町福井屋儀兵衛

借家

西田屋 徳治郎[㊤]

安政五年午十月廿六日

(張紙2)(実ナシ)

天満天神筋町炭屋幸七

借家

西田屋 本治郎

幼少ニ付 代判真三郎[㊤]

安政五年午十一月廿六日

(張紙3)

天満天神筋町炭屋幸七

借家

西田屋 本治郎[㊤]

慶応三年丁卯七月廿六日

堂嶋新地裏屯丁目

堺屋俊助借家

升屋 徳兵衛[㊤]

一拾軒

當時 仲間 持

(張紙1)(実ナシ)

道修町五丁目河内屋孝助支配

借家

福田屋 孫三郎

幼少ニ付 代判利助[㊤]

安政四年巳七月四日

(張紙2・3)(実ナシ)

道修町五丁目河内屋幸助

支配借家

福田屋 孫三郎

幼少ニ付 代判利助[㊦]

安政四年巳七月四日

(張紙4・5・6)(実ナシ)

堂嶋新地三丁目堺屋記治郎

借家

福田屋 永之助

幼少ニ付 代判利助[㊦]

安政四年巳七月四日

(四)

(表紙)

安政六年九月

取極申定帳

一明和度京飛脚渡世株式願上奉蒙御免、仲間と相定来候
処、其後得意先々入込及混雜、天明度仲間二行ニ相成、
御公刃及出入、天明八申年四月西町 御奉行松平石見
守様御戴許之上右出入亘濟、右株御免之上者为申合、於
仲間急度取締可致儀ハ可為勝手、若不相用我意不埒之
筋有之候ハ、株御取放、品ニ寄急度御咎可被 成之旨
被為 仰渡候亘奉恐入、向後得意羅取、且我意之振舞
致候もの有之候ハ、其段御断奉申上、何様共御咎奉請
候儀、一統連判井所役人奥印を以御請書奉差上、仲間一
統無別条亘濟相成候段、広太之御慈悲難有可奉存候事

一前文之通御聞濟相成候上は、仲間一統正路ニ相候、家業相統可致之所、年月相立、万一心得違之者出来候節、急度為取締、天明八申年四月約定申合有之候通、別船別往来取斗ニ相成有之処、其節は手引舟出船毎夜亥刻ニ付、別船ニ相成候而者、甚迷惑ニ候間、手元急度相改、実意を以詫出候得共、文化十四丑年十一月6、手引舟出船毎夕酉刻限ニ相成候間、當時ニ至、別船別往来之儀格別迷惑ニ不及候間、以後幸イニ我意之振舞致し、他之得意羅取不法之儀出来候而は、一統及混雜、且取締相成候而は、渡世向差支候儀は勿論、一統家名相統ニ茂可相拘、依之非分為禁之、且は仲間一統嚴重之取締を以、家名為永統、左之條目再誓約致候事

一從前年中合之條目、急度相守可申候事

一他店得意謀密之取斗を以羅取中間敷候、万一右様之儀有之相願候ハ、別船別往来ニ相成候共、一言之申分無之候、尤別船別往来中ハ、一統積入荷物船賃、往還之

京飛脚仲間について(藤村)

飛脚人足賃、自ラ高割ニ相成候間、別船別往来支済之上者、船賃ハ勿論、陸飛脚人足賃、宰領賃等、前間之振合ヲ以、都而諸入用無滯不殘差出可申候、猶又對談行届和順之節は、以來為懇意乗組頼益取扱可申候事
附、別船別往来中、一件諸入用、其当人ハ相弁、急度出錢可致候事

一別船別往来取斗ニ相及候而も、弥我意ニ募、一統中差支ニ相成候ハ、奉願上、看板、目印行燈、仲間江取上ケ、諸得意中江休渡世之儀相達、都而諸便理差支不申候様、一統中江御請持被成候共、一言之申分無之候、為後年誓約條々連判仍如件

安政六己未年九月

年行司

和泉屋治郎兵衛

同

京屋清右衛門

大丸屋甚之助

天満屋 六兵衛[㊤]

代判忠五郎[㊤]

(張紙1)

慶応三丁卯年七月

天満屋 六兵衛[㊤]

代判山家屋卯兵衛[㊤]

大坂屋七郎右衛門

明治二巳年十一月

代判半兵衛[㊤]

(張紙1)

萬屋 駒藏[㊤]

大坂屋七郎右衛門[㊤]

(張紙1)

慶応三丁卯年八月六日

萬屋 駒藏

(張紙2)

幼少ニ付代判平三郎[㊤]

道修町四丁目大坂屋嘉介

文久三年亥五月十六日

支配借家

(張紙2)

淀屋七兵衛[㊤]

萬屋 駒藏

明治三年庚午正月廿八日

代判佐兵衛[㊤]

慶応貳丙寅十一月六日

福田屋孫三郎[㊤]

(張紙3)

(張紙1)

萬屋 駒藏

福田屋 喜兵衛[㊤]

萬延元年申六月十六日

和泉屋徳右衛門^印

小和田屋市太郎

代判庄兵衛^印

(張紙1)

難波屋惣右衛門^印

・文久四年子七月
・(ニナシ)

(張紙2)

難波屋惣右衛門

幼少ニ付代判七兵衛^印

慶応三丁卯年七月廿六日

升屋徳兵衛^印

福田屋永之助^印

代判利助^印

(張紙1)

福田屋 嘉次郎^治

代判清右衛門^印

萬延元年申六月十六日

(張紙2)

福田屋 嘉治郎

幼少ニ付代判衆七^印

文久元年酉八月六日

(張紙3)(実ナシ)

福田屋 嘉次郎

幼少ニ付代判衆七^印

元治元年子十一月十六日

西田屋本次郎

代判真三郎^印

(張紙1)

西田屋 本治郎^印

慶応三丁卯年七月廿六日

京飛脚 仲間

文久四甲子年

		<div>〔大〕 朱</div>		京飛脚		年中定	
正月	元日二日三日十日 十四日十五日十六日休	二月	休日なし	<div>〔三〕 朱</div> 月	朔日二日三日休	四月	休日なし
六月	六日十三日十七日廿二日 廿五日卅日小ノ月ハ廿九日	<div>一五 朱</div> 月	三日四日五日休				
江戸	并ニ東海道筋 三六九十九日休	加賀	并能登中三八 小ノ月廿七日	越前	福井 丸岡十日 三国 府中卅日 敦賀三八	若狹	小浜熊川 毎日 北方 八幡長浜 八日市
近江	大津 八幡高島郡 毎日 日野 二七彦根 二五八	美濃	岐阜 一六五十 竹ヶ鼻	伊勢	津 松阪山田 三六九十休 白子 神戸 四日市 桑名	尾張	名古屋 半日 大山 三八
大阪南江戸堀巻丁目 京屋清右衛門 京三条柳馬場角 出明石屋清五郎							

東国筋 西国筋 北国筋 飛 脚 出 所 仕立時限飛脚何時ニても差出し申候、生魚類ハ三月々五月迄ハ、昼八ツ時迄ニ御持參可被下候、別段早飛脚差立候、尚又金銀并ニ手形入、乍憚私シ店方迄、御持參可被下候様奉願可候、尤八ツ時迄ニ御使被下候ハ、別段受取差出し可申候、但し先払一切御断奉申上候	一七 月 十一日限り十三日十四日十五日十六日休 十二日ハ 金銀手形入御状仲間組合せ 正八ツ時限り別仕立差立申候		一八 月 休日なし		一九 月 七日八日九日休		十 月 晦日休 小ノ月ハ廿九日		十一 月 休日なし		十二 月 廿七日限り <small>小ノ月</small> 廿八日 <small>小ノ月</small> 廿九日 廿八日ハ金銀手形入御状仲間組合せ 小ノ月ハ正八ツ時限り別仕立差立申候	
	撰 津 尼ヶ崎 灘目 兵庫 有馬 住吉 平野 池田 伊丹 富田 茨木 高槻 三田 井川 西往来筋		河 内 八尾 久宝寺 井 南河内 守口 牧方 京往来筋		和 泉 堺 貝塚 岸和田 佐野 岡田		大 和 南部 郡山 初瀬 井 国中 川つら		紀 伊 若山 湯浅 日高 田辺 高野山 粉川		播 磨 明石 姫路 高砂 室 三木 赤穂 龍野 井 中国往来筋	
	丹 波 龜山 福智山 笹山 園部		丹 後 宮津 一日狭 田辺									

(補1) 前述の通り幕末には大坂本屋仲間が京飛脚福田屋の請負であるが、明治三四年八月緒言、玉淵堂三木佐助口述「玉淵叢話」中巻七頁(三木佐助著、水田紀久解説「明治出版史話」書誌書目シリーズ4)には、明治二年頃の大坂書林河内屋佐助と福田屋の関係を次の様に述べている。

京飛脚と江戸飛脚 其頃はまだ郵便といふものが有りませぬから京都あたりへ手紙を出しますには兼ねて淡路町井池西入北側の福田屋といふ京飛脚屋と特約して置くのであります。すると特約の家だけへは日暮前に「福田屋用事い」と飛脚が廻つて来ますので、それが手紙一本につき百文遣れば京都の目的先へちゃんと届けて呉れます、それから江戸行の書状は遠隔の地だけに餘程其賃金が高うござりまして普通七日限と云ふのが二歩で三日限となると一本の手紙が七兩二分です、随分驚くべき郵便税で今頃斯様な値で遣りましたなら政治家は戦争経営で頭を痛める必要もなく又無理に外債募集をしなくともよからうと思はれます。戯談は措いて三日限りは諸大名の使に東海道筋を早駕籠で走りましたもので極々至急を要するものは是に手紙を托するより外仕方がなかつたのでござります。

明治期に福田屋は移転し、賃銀も高額になつてゐる事がわかる。

